ISSN 1348-8384

拓殖大学 語学研究

Takushoku Language Studies

2018. 12
No. 139

拓殖大学 語学研究
2018 年 12 月
第 139 号

目　次

〈論文〉

古典文法学習における係り結び……阿久津　智（ 1 ）

共同研究〈諸文化圏・諸言語圏の呪い・穢れ・占い・迷信〉
ヒンディー文学における「呪い」と「予言・夢」
――叙事詩『ラーム　チャリト　マーナス』
で 16 世紀のトゥルスィーダースが詠い
訴えようとしたこと ―― ……坂田　貞二（ 29 ）

〈研究ノート〉

Political Correctness における推奨語のコーパス分析：
職業を表す語に関する使用状況の考察　……谷岡　　亮（ 51 ）

〈抄録〉

「英語で授業をする」ことに関する研究(2)
――トップクラスの進学校生徒の意識調査分析 ――
……保坂　芳男（ 69 ）

拓殖大学　研究所紀要投稿規則
拓殖大学言語文化研究所　『拓殖大学 語学研究』執筆要領…（ 85 ）

Takushoku Language Studies
No. 139

Contents

〈Articles〉

Kakari-Musubi in Japanese Classical Grammar Learning
…… AKUTSU Satoru（ 1 ）

The Role of Curses and Prophecies
in Ram carit manas by Tulsidas ……SAKATA Teiji（ 29 ）

〈Study Note〉

A Corpus Analysis of Politically Correct Words Referring
to Occupations …… TANIOKA Ryo（ 51 ）

〈Abstract〉

A Study of Teaching English through English:
With a Focus on Attitudes of High School Students
at the Top Lebel ……HOSAKA Yoshio（ 69 ）

Submission of Manuscript

Instructions for Contributors

〈論　文〉

古典文法学習における係り結び

阿久津　　智

要　旨

係り結びは，高校の古典文法書などにおいては，主に係助詞と文末の用言との呼応関係（いわゆる「係り結びの法則」）として取り上げられている。係り結びは，日本語文法の歴史的研究における重要なテーマであり，この現象に関する研究は，古くから多角的に進められている。その近年の成果を古典文法学習に取り入れることを考えた場合，統語論的観点から，構文として取り上げるほかに，談話分析的観点から，文章中における役割を取り上げることなどもできるであろう。

キーワード：係り結び，古典文法学習，係助詞，中古語

1. はじめに

本稿では，古典文法学習において，係り結びをどのように扱うことができるかについて，考えていく。以下，まず，古典文法学習（教材）において係り結びがどう扱われているかを概観し（2 節），次に，日本語文法研究における係り結び研究の動向について概観し（3 節），続いて，古典文法学習において係り結びをどう扱うことができるかについて検討したい（4 節）。

2. 古典文法学習における係り結び

係り結びは，古典日本語に関する文法研究の中で重要な位置を占める。たとえば，「［係り結びは］日本語研究史の中でも中世から研究されて来ている，最も研究史の蓄積のある問題である上に，国語学者以外の言語学者の興味をも引きつける，注目度の高い現象だ」（金水 2002: 88），「係り結びの変遷を語ると，文法の変遷の話しの半分くらいは済んでしまう」（野村 2011: 74），「この千年紀の日本語の文法に何が起きたのかを考える時には，係り結び衰退の原因を問うことこそが重要な課題であると考えられる」（柳田 2016: 26）などとされ，日本語史や日本語研究史の研究において重要な研究課題とされている。

一方，国語教育では，係り結びは，古典文法学習における，主要な学習（指導）項目となっている。『高等学校学習指導要領』（平成 21 年 3 月）には，「文語のきまり，訓読のきまりなどを理解すること。」（「国語総合」2 内容〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕⑴ア㈠）とあり，この中の「文語のきまり」について，『高等学校学習指導要領解説 国語編』（平成 22 年 6 月）には，「『文語のきまり』には，文語文法のほか歴史的仮名遣いなども含まれる。特に現代語と異なる古文特有のきまりに重点を置いて，仮名遣いや活用の違い，主な助詞・助動詞などの意味・用法，係り結び，敬語の用法の大体などについて指導し，古文を読むことの学習に役立つようにする。」（「国語総合」3 内容〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕⑴ア㈠）とあり，「係り結び」が挙げられている（下線は筆者）。

実際に，高校生向けの古典文法書（副教材）に，係り結びについて，どのような事項が取り上げられているかを，市川孝・山内洋一郎監修『古典読解のための 標準古典文法 三版四訂』（第一学習社 2018）から「係助詞」

の項を，例として挙げておく[1]（注釈や訳，「読解のポイント」[2] などは省略する）。

4　係助詞

種々の語に付いて，強意・疑問・反語などの意味を添え，文末を一定の結びにする助詞を，**係助詞**という。文末の結び方には，A 連体形・已然形で結ぶもの，B 原則として終止形で結ぶもの，の二とおりがある。

A　連体形・已然形で結ぶもの ── 〈係り結びの法則〉 ──

文中に係助詞「ぞ・なむ・や（やは）・か（かは）」が用いられると，文末を連体形で結び，「こそ」が用いられると文末を已然形で結ぶ。このきまりを**「係り結びの法則」**という。

係り結び一覧

<table>
<tr><th>係助詞</th><th>意味</th><th>結びの活用形</th><th rowspan="6">〔普通文〕空　広し。
→　空**ぞ**　広き。
→　空**なむ**　広き。
→　空**や**　広き。
→　空**か**　広き。
→　空**こそ**　広けれ。</th></tr>
<tr><td>ぞ
なむ</td><td>強意</td><td rowspan="2">連体形</td></tr>
<tr><td>や（やは）
か（かは）</td><td>疑問・反語</td></tr>
<tr><td>こそ</td><td>強意</td><td>已然形</td></tr>
</table>

ぞ・なむ・こそ　（種々の語に付く。）

1　強意

1　①その煙，いまだ雲の中へ立ちのぼると**ぞ**言ひ伝へたる。

（竹取物語・富士の山）

②橋を八つ渡せるによりて**なむ**，八橋といひける。　（伊勢物語・九段）

③折節の移りかはる**こそ**，ものごとにあはれなれ。　（徒然草・一九段）

や（やは）・か（かは）　（種々の語に付く。）

1　疑問（……カ）

2　反語（……ダロウカ，イヤ，……デハナイ）

1　④この鏡には，文**や**添ひたりし。　（更級日記・鏡のかげ）

⑤いづれの山**か**，天に近き。　（竹取物語・富士の山）

2　⑥（桐の花は）をかしなど，世の常に言ふべく**やは**ある。

（枕草子・木の花は）

⑦生きとし生けるもの，いづれ**か**歌をよまざりける。　（古今集・序）

◆■係り結びの注意

①　**結びの省略**　係助詞が文中にあっても，それを受ける結びの語が省略されることがある。このような場合，「あり」「侍り」「言ふ」などの語を補えばよい。

・ひとりありかむ身は，こころすべきことに**こそ**（あれ）

（徒然草・八九段）

②　**結びの消滅**　係助詞が文中にあっても，それを受ける述部に接続助詞が付くなどして下に続くときは，係り結びが成立しない。「結びの流れ」ともいう。

・たとひ耳鼻**こそ**切れ失すとも，命ばかりはなどか生きざらむ。

（徒然草・五三段）

③　**「こそ――已然形」の逆接用法**　「こそ」を受ける結び（已然形）のところで文が終止せずに下の句に続くときは，逆接の意味が加わる。「逆接強調」ともいう。

・中垣**こそ**あれ，一つ家のやうなれば，望みて預かれるなり。

（土佐日記・二月一六日）

B　原則として終止形で結ぶもの

は	（種々の語に付く。）
1	**ある事柄を他と区別する。**（……ハ）
1	①木の花**は**，濃きも薄きも紅梅。　（枕草子・木の花は）
も	（種々の語に付く。）
1	**並列**（……モ……モ）

2　添加（……モ・……モマタ）

3　強意（……モ）

1　②色**も**香**も**同じ昔に咲くらめど年ふる人ぞあらたまりける。

（古今集・五七）

2　③聖海上人，そのほか**も**，人あまた誘ひて，　（徒然草・二三六段）

3　④雪の降りたるは，言ふべきに**も**あらず。　（枕草子・春は，あけぼの）

係り結びは，中世の歌学書において注目され，近世に本居宣長によって，その法則性が実証的，体系的に示され[3]，これが明治期の文法教科書などに取り入れられた。明治後半には，大槻文彦が，係り結びを「結法」（「尋常ノ結法」，「ぞ，なむ，や，か，ノ結法」，「こそノ結法」）としてまとめ，この中で結びの流れ（「転結」）などについても取り上げた（大槻 1897）[4]。その後，山田孝雄の「係結といふ事は必しも相対せる語にあらず，［中略］結とは係に対する語にあらずして句の結成をいへるものなり。」[5]（山田 1908: 1301）とする見方，松下大三郎の，「係語は提示的修用語［提示語］の一種であつて［中略］諸種の連用的格へ助辞『ぞ』『なむ』『や』『か』『こそ』『な』［禁止］の附いたもの」[6] で，「係と結の照応を係結と云ふ。」（松下 1928: 717, 782）とする見方，松尾捨治郎の，「係結といふ中に，有らゆる文法上の現象を含ませることが出来る。」（松尾 1928: 51）として，係り結びを「語の断続」とする見方など，係り結びに対する幅広い見方が諸家によって示されたが，こういった学説の多くは，その後の学校文法には取り入れられなかった[7]。文法書で扱われる係り結びの内容は，昭和前半には，ほぼ今日の文法書に見られるようなものになり，たとえば，橋本進吉の『改制新文典別記 文語篇』（冨山房 1938）には，「係結の法則」として，助詞「ぞ」，「なむ（なん）」，「や」，「か」，「こそ」とそれを受ける終止の形が示され，その「注意」として，上に挙げた『標準古典文法』の「係り結びの注意」の①～③に当たるものなどが取り上げら

れている。また，時枝誠記の『日本文法 文語編』（中教出版 1950）には，「係結の法則」，「係結の法則の解消」（結びの流れ），「結びの省略」，「係結の不成立」（「ここにおいてか余もまた惑へり。」，「君の言やよし。」など）が取り上げられている（鈴木 1981 による。下線は筆者）[8]。

今日の学校文法において，「係り結び」は，上に挙げたように，主に係助詞と用言との呼応関係（いわゆる「係り結びの法則」）を指し（小田 2016: 231），その扱いは，形式が中心になっているようである[9]。特に，「強意」の意味をもつ係助詞，「ぞ」，「なむ」，「こそ」は，「特に訳さなくてもよい。」（『基礎から学ぶ 解析古典文法 改訂版』桐原書店 2005: 112）などとされ，大学入試の受験対策としての古典文法学習などでは，その役割があまり重要視されていないようである[10]。

一方で，係り結びを，文の種類や用言の活用と関連させて取り上げる試みも行われている。鈴木康之らのグループは，たとえば，「平叙文」である「草むらに 虫のこゑ す。」に対する形として，「草むらにや 虫のこゑ する。」（「草むらに」を疑う），「草むらに 虫のこゑや する。」（「虫のこゑ」を疑う），「草むらに なにのこゑか する。」，「いづくにか 虫のこゑ する。」などを「疑問文」として，「草むらにぞ 虫のこゑ する」（「草むらに」を強調），「草むらに 虫のこゑぞ する」（「虫のこゑ」を強調），「草むらになむ 虫のこゑ する」（「草むらに」を強調），「草むらに 虫のこゑなむ する」（「虫のこゑ」を強調），「草むらにこそ 虫のこゑ すれ。」（「草むらに」を強調），「草むらに 虫のこゑこそ すれ。」（「虫のこゑ」を強調）などを「強調文」として挙げ，文の種類によって，動詞の終止の形が変わることを示している[11]（鈴木 2010: 34）（表 1）。

このような，係り結びを構文としてとらえ，そこに現れる形態を体系的に示すことは，古典文法の学習や古典の読解に役立つだけでなく，文語文による表現活動などにもつながるものと思われる[12]。

表 1　鈴木康之らによる古典動詞の活用表

		第一終止形 ［平叙文］ ［（終止形）］	第二終止形 ［疑問文］ ［「ぞ」「なむ」の強調文］ ［（連体形）］	第三終止形 ［「こそ」の強調文］ ［（已然形）］
（断定）	一般叙述形 ［現在や未来］	す	する	すれ
	第一過去形 ［過去（1）］	しき	せし	せしか
	第二過去形 ［過去（2）］	しけり	しける	しけれ
（推量）	一般推量形 ［現在や未来の推量］	せむ	せむ	せめ
	過去推量形 ［過去の推量］	しけむ	しけむ	しけめ
命　令　形		せよ	—	—

鈴木（2010: 36）による。［ ］内は，青木（2010: 49）により加えた。

3. 日本語文法研究における係り結び

3 節では，日本語文法研究において，係り結びについて，これまで，どのようなことが問題になっていて，どのような研究が行われ，どのようなことがわかってきているのか（あるいは，どのような見方が示されているのか），について見ていく。

半藤（2003a: 163）は，「係結びをめぐる従来の論述」には，大きく，⑴「文末曲調終止［通常の終止形ではない終止法］という形式面を重視し，意味的な記述をも含めて，古典語の枠組みで捉える」立場と，⑵「現代語にも通ずるものとして，係結びの普遍的価値を見出す」立場との 2 つのものがあるとする。これらの研究は，いずれも，「係結の本格的研究の嚆矢

とされる」本居宣長の研究（『てにをは紐鏡』1771 刊，『詞玉緒』1785 刊）や，「係結」という用語を初めて使い，宣長の研究を「修正」した萩原広道の研究（『てにをは係辞弁』1846 序），これらを「批判的に継承し」，「係結研究の現代における基礎をつくった」山田孝雄の研究（『日本文法論』1908，『日本文法学概論』1936 など）の影響を受けて（あるいは，その解釈をめぐって）進められてきたものである（引用は，小柳 2001: 47）。特に，半藤の⑵に関しては，山田孝雄の「抑も係とは述語の上にありてその陳述の力に関与する義にして，結とは係の影響をうけて陳述をして終止するをいふ」（山田 1936: 476）という考えを継承し，係り結びを「係助詞と文末の述語の呼応関係ばかりでなく，いわゆる『係り受け』の関係までをも含んだ現象」（舩城 1995: 279）として分析する研究にまで発展してきている[13]。

金水（2002: 89）は，もう少し具体的に，「係り結び現象が問いかける問題」を，a. 係助詞の意味・機能，b.「係り」と「結び」の関係について，c. 係り結びの歴史，d. 係り結びの対照研究，の 4 つに大きく分け，さらに，以下のように，細かく分類して示している（一部表記を変えた）。

a．係助詞の意味・機能

a.1 「や」，「か」の意味的・統語的機能は何か。「や」と「か」はどう違うのか。またその歴史的変化は？

a.2 「ぞ」，「なむ」の意味的・統語的機能は何か。「ぞ」と「なむ」はどう違うのか。またその歴史的変化は？

a.3 「こそ」の意味的・統語的機能は何か。またその歴史的変化は？また，「ぞ」と「こそ」の違いとは何か。

b．「係り」と「結び」の関係について

b.1 なぜ「ぞ」「なむ」「や」「か」は“連体形”で結ばれるのか。

b.2 “連体形”とは何か。意味的・統語的機能とは何か。

b.3　なぜ「こそ」は“已然形”で結ばれるのか。

b.4　“已然形”とは何か。意味的・統語的機能とは何か。

b.5　係り結びの「流れ」とは何か。どのような条件のときに流れるのか。

b.6　なぜ係助詞は一文に最大一つしか表れないのか。

b.7　係りと結びの位置関係はどのように記述されるか。

c．「係り」と「結び」の関係について

c.1　係り結びはいつ頃発生したのか。それはなぜ，どのようにしてか。

c.2　係り結びはどのように発達したか。上代の係り結びと中古の係り結びにはどのような相違点があるか。

c.3　係り結びはいつ頃，なぜ，そしてどのようにして滅んだか。あるいは，本当に滅んだのか。

c.4　疑問文はどのように変化してきたか。

d．係り結びの対照研究

d.1　現在，方言に係り結びは残っているか。残っているとすれば，どのようなものか。古代語との共通点，相違点は何か。

d.2　世界の言語に，係り結びに類似の現象はあるのか。あるとすれば，どのようなものか。

ここでは，これを参考に，上の d. を除く，a.〜c. のうち，主なものに関する研究をいくつか挙げておく(14)。

このうち，特に近年研究が盛んに行われているのは，a.1 の「や」と「か」に関する研究，c.1 の係り結びの発生をめぐる研究，また，この両者に関連して，b.2 の連体形についての研究のようである。

a.1 の，「や」と「か」の違いや変遷に関しては，澤瀉久孝の，「［上代に於いて］特に『か』が疑問の意に多く用ゐられ，『や』が詠嘆乃至反語の

意に多く用ゐられた［中略］時代と共にこの『か』と『や』との区別が混用せられ，もと『か』のところへも『や』が用ゐられるやうになつた。」（澤瀉 1938: 15）とする研究が古い。その後，「『か』は『疑い』の気持ちを表し，本来，疑問点指示のはたらきをもつものである。これに対して，『問い』の表現にあずかるのは『や』という助詞で，文中に挿入された『や』が，その文全体の『問い』の性格を強める」（阪倉 1993: 158, 163 などによる）とする説や，「ヤ　疑問詞を承けない　古くは確信ある断定を相手に突きつけ，後に推測・疑問を表明。」，「カ　疑問詞を承ける　自分自身で判断不能と表明。後で相手に尋ねるにも使う。」（大野 1993: 340）とする説[15] などが現れた。近年では，情報構造の観点から，「や」について，「ヤの対・聞き手的な問い掛け性の強さから，意味としての②問い，③反語，④不望予想［話者にとって望んで待たれるようなものではない事態の予想］を説明する。［中略］これらは特有の表現価値を含んだ，上代ヤの領域である。とともに，問い掛けと対・内容的な疑問との連続性から①疑問［本来はカの領域］にヤの領域は拡大していった」（野村 2001: 23）とする説や，各時代における疑問文の調査から，「カが疑いを，ヤが問いを表すという説の妥当性を疑わせる。」，「疑問詞疑問／肯否疑問［イエス・ノー疑問文，一般疑問文］の区別については，各時代の資料で凡そ異なる構文によって区別されていたことが分かった。[16]」（衣畑 2014: 36）などとする分析結果などが示されている。

c.1 の係り結びの発生については，特に連体形結びに関して，重要な起源説として，「倒置説」（大野晋），「挿入説」（阪倉篤義），「注釈説」（野村剛史）がある（名称は，野村 2002: 12 による）。大野（1993）の説は，「A ハ B ゾ　の形であった」ものが「B ゾ A（ハ）　の形に配置」（倒置）されたもの（p. 198），というものである（「ナム・ヤ・カ」も同様）。阪倉（1993）の説は「いわゆる係り助詞の『か』『や』『ぞ』について［中略］連体形終止の喚体的な文が表すいろいろの意味の中に，すでに疑問ないし

は感動の意味が含まれているがゆえに，特にその意味を強調し明確化するものとしてこれらの助詞が挿入された」（p. 224）というものである。野村（1995）の説は，たとえば，「カによる係り結び」については，「連体止め句からはじまって，注釈的二文連置を経，『疑問的事態 ── 実事的事態』の対立的二事態の相関とも言えるものから『―カ―ム』の意味的呼応を伴った係り結びへと至」（p. 24）ったというもので，これは，たとえば，「うま酒を三輪のはふりがいはふ杉手触れし罪か君に逢ひかたき」[17] では，「うま酒を…罪か」（係り句）と「君に逢ひかたき」（連体形止め句）の 2 文が連置され，前者が後者の注釈になっているが，このようなものから，「愛しと我が思ふ妹を思ひつつ行けばかもとな行き悪しかるらむ」[18] のような，「疑念的情意が一文全体を覆う」係り結びに発展した，というものである（「ソ（ゾ）」による係り結びは同様に成立し，「ヤとナム（ナモ）の参加」は遅れたという[19]）。今日では，この説が，最も有力なものとなっているようである[20], [21]。

b.2 については，連体形終止法に関する研究をいくつか挙げておく。小池（1967）は，連体形終止法に，従来いわれてきた余情や詠嘆を表す用法のほかに，「解説的用法」があったことを挙げているが，近年では，山内（2003）が，『源氏物語』の会話や心理の文で，「こういうことでしたと，まとめるところに連体形終止文が現れている。」（p. 141）とし，また，土岐（2005）は，中古の和文会話文において，「連体形終止の表現価値の本質は，当該情報の聞き手による是非の不問性にあり，発話者が聞き手に対して，自己の立場からのある種の主張を行うことを意図するものであると考えられる。」（p. 28）としている。また，吉田（2005）は，中古の仮名散文作品を調査し，「文中に係助詞的要素を持たない会話文が弱活用動詞［終止形と連体形の形態が異なる動詞］を述語として文末に据えるとき，それが終止形である確率とそれが連体形である確率とは，ほぼ半々なのである。さらに，文中に係助詞的要素がある場合，すなわち係り結びを起こ

している場合を含めれば，会話文の弱活用動詞述語文にあっては，終止形より連体形のほうがはるかに優勢だということになる。」（p. 49）と，会話文末における連体形の優位性を明らかにしている[22]。ほかに，談話論（文章論）的な観点から，中古における連体形終止の「なむ」による係り結びについて，「『なむ』の用例に多い『用言の連用形＋て＋なむ』は言い訳の表現である」が，「『はっきりした意志表示』がすでになされている時には，『言い訳，理由』を述べるに当たり，『なむ』を用いない」（木下 2001: 32, 34），「聞き手を納得させるために説明する部分では，ナムが使用される」（西田 2009: 51），「係り結びは叙述の大きな断止を予告するのに有効に機能していた」（小松 2014: 307）などとする説も出されている。「や」による係り結びについては，「『主語＋ヤ～述語＋ム』という文形式」には，疑問や質問というより，「断定回避」と呼ぶべきものや，「危惧」を表す用例が多い（近藤 2017）とする研究なども見られる。

4. 古典文法学習における係り結び（再び）

続いて，係り結びについて，古典文法学習に，何をどう取り入れるべきか考えてみたい。

初めに，古典文法が中古語（平安時代の話し言葉）の文法を基本とするということを確認しておきたい。日本語は，（他の言語と同様に）時代とともに変化してきたが，「日本語では，平安時代の話しことばが手本とされ，書きことばとして用いられてきた。その書きことばには，鎌倉時代以降の話しことばの要素も混じっているが，全体としては，平安時代のことばから大きく隔たることはなかった。こうした平安時代の話しことばに基づく，古典で用いられる言語体系を『古典語』という。」（沖森 2012: 1）とされる。亀井孝は，「過去の文化的遺産が豊富であればあるだけ，文語にもいろいろなものがあっていい道理である。しかし，ここ［『概説文語

文法』］では，平安文学の古典語を中心として述べる。」（亀井 2017: 13）と述べ[23]，小西甚一は，「古典語というなかには，古代語［万葉時代の言い方］が入らない」，「万葉時代の言い方を古典語としてあつかうなら，鎌倉時代はどうだということになり，室町時代・江戸時代……といってくると，活用表がおそろしく複雑になって，とても学校文法には向かない。いちおう古典に出て来るスタンダードな活用のしかたという意味で，中古の和文を基礎とした形が採りあげられているわけなのである。」（小西 2016: 142,144）と述べている。係り結びも，時代によって，その様相が大きく異なるわけであるが（だからこそ，係り結びが日本語研究史の重要なテーマになるのであるが），ここでは，以下，（中古語に基づく）古典文法における係り結びを中心に，考えていくことにする。

中古語の係り結びの（形式上の）特徴については，先に挙げた『標準古典文法』にあるとおりのようであるが，同書にない，細かい点について，近年の係り結び研究の成果として示されたことなどを含め，いくつか箇条書きで挙げておく（以下は，近藤 2010: 84，野村 1995: 22，半藤 2003b: 14，佐佐木 2003: 262 などによった）。

・「か」

「か」は，疑問詞疑問文のみに用いられる。上代では，肯否疑問文にも多く用いられた。

・「や」

「や」は，もっぱら肯否疑問文に用いられる。結びが「む」，「らむ」，「べし」などになることが多い。

なお，係り結びは，中古に盛んに用いられているが，すでに形式化しており，係助詞が情報（疑問）の焦点を表すことはなくなっていた。

・「なむ」

「なむ」は，和歌では用いられにくく，もっぱら散文で用いられる。

使用される時代は，ほぼ中古に限られる。

・「こそ」

「こそ」の係り結びは，逆接条件表現を起源としている。

「こそ」は，ある選択肢の中から１つを選ぶ選択強調（対比用法）に用いられることが多い。その中には，逆接関係を示すものがある。単なる強調（主題的用法）も多い。

・連体形終止法

中古の仮名文学作品の会話文中では，連体形終止法の使用頻度は，終止形と同じかそれ以上に高い。

連体形終止法には，余情や詠嘆を表す用法のほか，解説やまとめを示す用法などもある。

・已然形単独用法（上代）

上代の活用語の已然形には，「こそ」の結びではなく，「ば」，「ど」，「ども」などの助詞が下接しない用法が見られる。これらには，それ以下の表現と間に内容的な因果関係が認められるものが多いが，文をはっきり終止するという機能はそなわっていない[(24)]。

さて，古典文法学習における係り結びの積極的な扱いを考えようとする場合，次の点などが重要になってくるであろう。

①係り結びを構文（文の種類）として扱い，その機能的価値を示す。

②係り結びの文章中における役割を示し，それを読解に取り入れる。

①については，先に挙げた鈴木（2010）に示されているが，鈴木らの表（表１）に「係り」などを加えた表を挙げておく（表２）。

ところで，先に見たように，「強意」の係助詞は，受験対策用の参考書などでは無視されるようであるが，これは，この助詞の機能が，文法カテゴリー的なものでなく，「情緒」的なものだからであろう。

これを，（ユニバーサルな）言語学の観点から見ると，「強意」は，プロ

表 2　古典動詞の活用表（表 1 に「係り」などを加えたもの）

文の種類	平叙文	疑問文		強調文		強調文
係り	（なし）	や	か	ぞ	なむ	こそ
		疑問・反語を表す。肯否疑問文に用いられる。 文末用法がある。	疑問・反語を表す。疑問詞疑問文のみに用いられる。 文末用法がある。	強意を表す。 文末用法がある。	強意を表す。和歌には用いられない。 文末用法はない。	強意を表す。 文末用法はない。
結び	第一終止形（終止形）	第二終止形（連体形）				第三終止形（已然形）
（断定）一般叙述形	す	する				すれ
（断定）第一過去形	しき	せし				せしか
（断定）第二過去形	しけり	しける				しけれ
（推量）一般推量形	せむ	せむ				せめ
（推量）過去推量形	しけむ	しけむ				しけめ
命令形	せよ	—				—
		連体形終止法には，余情や詠嘆を表す用法のほか，解説的な用法などもある。				本来已然形に終止の意味はない。

ソディー（音の高さ，長さ，強さなど）でも表されるもので，また，それを示す言語標識があったとしても，その役割をプロソディーで代替することが可能なものであろう[25]。たとえば，「雪のいと高うはあらで，薄らかに降りたるなどは，いとこそをかしけれ。」（『枕草子』第一七四段）の「いとこそ」は，「こそ」によって「をかし」さの程度の高さを表しているが，音声的に，「いと」の音の高さや大きさを上げたり，あるいは，音を長く延ばしたりして（インテンシティーで），表すことも可能であろう。

また，「父はなほ人にて，母なむ藤原なる。」（『伊勢物語』第一〇段）の「母なむ」は，「なむ」によって「（父はそうではないが）母のほうは」という対比的な強調を表しているが，音声的に，「母（は）」の音の高さや明瞭さを上げて（プロミネンスで），表すことも可能であろう。

これは，「疑問」についても同様で，疑問もプロソディー（上昇調のイントネーション）で表すことができる。ウェイリー（2006: 241）によると，「大多数の言語において，対極疑問文［肯否疑問文，一般疑問文］は文末で上昇調のイントネーションを使う。」といい，角田（2009: 246）によると，「世界の言語の圧倒的多数では，平叙文のイントネーションを変える方法で一般疑問文を作れる。」という。また，角田が調べた 130 の言語のうち，「約 93 の言語，即ち約 72% の言語には一般疑問文を示す印がある。例えば，日本語の『か』である。（日本語の『か』は文末に来るが，他の言語では，文頭に来るものも，その他の位置に来るものも有る。）」という（角田 2009: 246）。この「疑問の印」については，たとえば，「タイ語では，少なくとも話し言葉では，疑問の印 rɨ́ɨ を動かすことによって質問の焦点を示」すことができ，「昨日，マリーはソムサクを見ましたか。」というタイ語の文（タイ語は省略）の場合，「昨日」の後に rɨ́ɨ を付ければ「マリーがソムサクを見たのは昨日ですか？」となり，「マリー」の後に rɨ́ɨ を付ければ「昨日，ソムサクを見たのはマリーですか？」となるという（角田 2009: 15。下線は筆者）。現代日本語では，このような「質問の焦点」に付ける「疑問の印」はない[26]。そのため，現代日本語では「質問の焦点」部分をプロミネンスで表すことになる[27]。

古代日本語では，このような「焦点」は，係助詞で表された。ただし，係助詞のこの働きは，上代末には形式化が始まった（修辞上のもの，形式化したものとなった）ため，中古語では，「～や」や「～か」は，疑問の焦点を表すというより，文全体を疑問文とする印となったとされる（野村 1995: 22 は「疑念的情意は一文全体を覆っているのであるから，『―カ』

は一文の情意の卓立点を示すのみで，特に疑問の焦点を示すわけではない」と述べる）。とはいえ，係助詞が付く部分は，「情意の卓立点」（文の情緒的な強調点）ではあり，その形式と機能とを示すことは重要であろう[28]。

次に，②の「係り結びの文章中における役割を示し，それを読解に取り入れる」ことについて述べる。たとえば，先に挙げたように，「なむ」による係り結びには，談話論（文章論）的に見て，さまざまな用法があるようだが，実際に，作品を読みながら，「なむ」の談話的機能を考えるという学習方法もあるかと思う。たとえば，『竹取物語』や『伊勢物語』などは，文章が短く，比較的読みやすい作品であり，物語を読み進める中で，どういうときに「なむ」が使われているか考える，というやり方などもとりやすいかと思う。

『竹取物語』には，（テキストによって異なるようであるが，筆者が岩波文庫版で数えたところでは）係助詞の「なむ（なん）」は 36 例あり，そのうち会話文中のものが 28 例，地の文のものが 8 例であった。以下に，地の文のうち，5 例を挙げる[29]（阪倉篤義校訂『竹取物語』岩波書店（岩波文庫）1970 による。ページは同書のもの。下線は筆者）。

(1)　名をば，さかきの造となむいひける。（p. 9）
(2)　さる時よりなむ「よばひ」とは言ひける。（p. 11）
(3)　これをなむ「玉さかる」とは言ひはじめける。（p. 24）
(4)　それよりなん，すこしうれしき事をば，「かひある」とは言ひける。（p. 39）
(5)　そのよしうけたまはりて，つはものどもあまた具して山へ登りけるよりなん，その山を「ふじの山」とは名づけゝる。（p. 56）

これらは，すべて人や物事の言い方について述べたもので，このうち，

⑴以外はその言い方のいわれを語っている。また，これらは，話が一段落ついたところで使われている。同書の「解説」によると，この物語における「和文特有の助動詞『けり』によってむすばれている文の現れ方には，一つの傾向」があり，「この『けり』止め文が集中的に現れる」のは「各章の冒頭と結末の部分」で，「それぞれの章は，いわばこの『けり』止めの文章によって縁取りされている」という。上の⑴～⑸は，すべて「ける」で終わっており，⑴と⑵は章の冒頭部に，⑶～⑸は章の結末部に現れている（実は，⑴と⑵も，このあとから本題に入るという部分（いわば，小部分の結末部）に使われている）。つまり，この「…なむ…ける」は，言葉のいわれなどを語ることによって，物語の内容的な切れ目を示す役割を担っているといえよう。係り結びを追いながら，文章を読むことで，このようなことを考えることができるのではないかと思う。

5. おわりに

本稿では，古典文法学習における係り結びの扱いを考えてみた。

上では触れなかったが，「特に訳さなくてもよい」とされる「ぞ」や「なむ」について，これらが現代語のどういう言い方に当たるか，作品を読みながら考えるなどという学習もできるかと思う[30]。ちなみに，本居宣長は，『古今集遠鏡』(1797 刊）巻一「例言」で，「ぞ」を「サ」と訳している（船城 2013: 261)。その一部を引用して，以下に挙げておく（「早稲田大学図書館 古典籍総合データベース」による。表記を一部改めた)。

> ○てにをはの事 「ぞ」文字は，訳すべき詞なし。たとへば「花ぞ昔の香に匂ひける」のごとき，殊に力を入れたる「ぞ」なるを，俗言には「花ガ」と言ひて，そこに力を入れて，勢ひにて，雅語の「ぞ」の意に聞かすることなるを，しか口に言ふ勢ひは，物には書きとるべく

もあらざれば，今は「サ」といふ辞を添へて，「ぞ」に当てて，「花ガサ昔ノ」云々と訳す。「ぞ」文字の例，みな然り。（はし六オ）

一方で，「…ぞ…」を，「『……ぞ（ダ）！』で一応言い切」る，「判断を『ぞ』に集約して強調する」，「『ドウシタ〔ドンナダ・何ダ〕コト』のような意味の連体形括りは，判断を対象への観入或いは対象の想起に切替える」として，「…ヨ！…コト！」と訳すものなどもある（桑田 1969: 387, 385）。たとえば，『竹取物語』の「今はとて天の羽衣着る折りぞ君をあはれと思ひいでける」は，「……折リニナッテデスヨ！……思イ出シマシタコト！」のように訳される（下線は筆者）。宣長の「サ」に比べて，感情の表出がずいぶんと大きく感じられるが，これは，「情思の昂揚が一旦『ぞ』で爆発する」と見ているためである。

《注》

（1） 中学校の国語教科書における係り結びの取扱いについては，飯田（2016: 313）に紹介されている。飯田は「古典解釈のための体系的な文法事項として『係り結び』に触れるものが一般的である。」と述べている。

（2）「読解のポイント」では，「『や・か・ぞ・は・も』の文末用法」，「『もぞ』『もこそ』の用法」，「『は』のはたらき」が取り上げられている。

（3） 本居宣長は，「てにをはは。神代よりおのづから万のことばにそなはりて。その本末をかなへあはするさだまりなん有て。あがれる世にはさらにもいはず。中昔のほどまでも。おのづからよくとゝのひて。たがへるふしはをさ〳〵なかりける」と述べている（『詞瓊綸（ことばのたまのお） 一之巻』『増補 本居宣長全集 第九』1902 初版，1927 増補再版 p. 9）。宣長以前の研究については，佐藤 1977，仁田 1984 などを参照。

（4） 山田孝雄は，「係結の大体は大槻氏の所論にて足れり。」（山田 1908: 1295）と述べている。

（5） 舩城（2013: 168）によれば，山田孝雄は，『日本文法論』(1908）において，「〈かかりむすび〉が『修辞』的な文である」としていたが，『日本文法学概論』(1936）では「〈かかりむすび〉を修辞上の問題から除外して，全面的に構文論上のそれとするもの」と考えるようになったという。なお，山田

（1908: 612）は，「は」，「も」，「ぞ」，「なむ」，「こそ」，「や」，「か」，「な」（禁止）を「係助詞」とした（山田 1936 も，文語については同様である）。

（6） 松下（1928: 712）は，「提示語の中には，一，題目語，二，特提語，三，係語，この三種，及び此れらの混合したものが有る。簡単に言えば『は』『も』の附いたのが題目語，『ぞ』『なむ』『や』『か』『こそ』『な』の附いたのが係語，『のみ』『すら』『だに』『さへ』などの附いたのが特提語である。」としている。

（7） 山田（1908）は，「明治三十五年六月廿九日」（1902 年）の日付のある「緒言」の最後に，自著について，「今若この説を採りて直に普通の教育に施す者あらば，実に大早計の事にして著者の深く遺憾とする所なり。［中略］若社会が之を公認せば其の時はじめて普通の教育に応用せらるべし。学問の研究と教育の施設とを混同せざらむことを望む。」と述べている。

（8） 大野（1993: 335）は，この時期の係り結び研究について，「橋本進吉・時枝誠記という，今日の日本文法研究に大きい影響を与えている学者の文法体系においても正面に据えて考察されることはなかったし，問題として取り扱われてもいなかった。一般にこれは日本語の古典語だけに見られる特殊な現象で，特定の助詞と文末の終結部の呼応の問題にすぎないと扱われてきた。」と述べている

（9） 高等学校の教科書（国語総合）には（筆者の見た限りでは），いずれも，「係助詞」として，「は」，「も」，「ぞ」，「なむ（なん）」，「や（やは）」，「か（かは）」，「こそ」が挙げられているが，「係り結び（の法則）」としては，「ぞ」，「なむ（なん）」，「や（やは）」，「か（かは）」，「こそ」を用いるものだけが取り上げられている。なお，飯田（2016: 317）には，「学校文法で一般に係り結びに含めない『は・も―終止形』を係り結びとしているところに特徴がある」中学校の教科書（学校図書『中学校国語Ⅰ』2012）が紹介されている。

（10） 大学入試受験対策の古文の参考書には，試験問題の本文にある「強意」の「ぞ・なむ・こそ」について，「受験生は訳す必要はありません。私はいつも，『ぞ・なむ・こそ』は，上から×をして消させます。」などと述べられている（荻野文子『マドンナ古文 パワーアップ版』学研教育出版 2013: 49）。

（11） 鈴木（2010）の各終止形（表 1 参照）について，大槻（1897）には，「第一終止法」，「第二終止法」，「第三終止法」とある（鈴木 2010: 35）。佐伯（1988: 137）では，「普通終止法」，「ゾ・ナム終止法」，「ヤ・カ終止法」，「コソ終止法」，「命令終止法」などを使っている。

(12)　文語文を書く活動については，新『高等学校学習指導要領』（平成 30 年 3 月）「国語」に「古典を読み，その語彙や表現の技法などを参考にして，和歌や俳諧，漢詩を創作したり，体験したことや感じたことを文語で書いたりする活動。」（「古典探究」2 内容〔思考力，判断力，表現力等〕A 読むこと⑵ウ）として挙げられている（下線は筆者）。

(13)　たとえば，森重（1971: 159）は，「結びは活用形に限らず，ある種の呼応関係のもとに成立する何らかの形であればよい」という「最広義の係り結び」説を示し，尾上（1982: 16）は，「伝達の中で結果として帯びてしまう断続関係」を「消極的係結び」と呼び，川端（1994: 1）は，「係結は，述体の基本構造を形式化的に表現するものである。」（「述体」は，「一つのことがらを関係的な二つの項に分節し，分節された二項を，そのようなものとして統一する作用にあってそのことがらを叙述することの形式」（川端 1994: 13））と述べている。

(14)　ほかに，係り結び研究の歴史に関する研究などもある（これについては，本稿で，その一部に触れている）。また，「d. 係り結びの対照研究」に関しては，『日本語文法事典』（大修館書店 2014）「係り結び（方言）」，『言語学大辞典 6 術語編』（三省堂 1996）「係り結び」の「世界の言語に見られる係り結び」などを参照。

(15)　大野（1993）は，「疑問詞を承けない」か「疑問詞を承ける」かによって，係助詞を「二つの系列」に分けている。前者には，「ハ・コソ・ナム・ヤ」があり，これらは「承ける語」を「確定・既知・旧情報」として扱い，後者には，「モ・ゾ・カ」があり，「承ける語」を「不確定・未知・新情報」として扱うとしている（p. 340）。

(16)　疑問詞疑問には，『万葉集』に，「カ係り」と「疑問の助詞無し」が（ほかに，「カ文末」もある），『源氏物語』に，「カ係り」と「疑問の助詞無し」が現れ，肯否疑問には，『万葉集』に，「カ係り」，「ヤ文末」，「ヤ係り」，「カ文末」が，『源氏物語』に，「ヤ文末」，「ヤ係り」，「カ文末」が現れる（衣畑 2014: 93）。

(17)　『新編 日本文学全集 6 万葉集①』（小島憲之・木下正俊・東野治之 校注・訳，小学館 1994）巻第四（712 番歌）の訳は，「（味酒を）三輪の神人が 大事にしている神木の杉に 手を触れた罰でしょうか あなたにお会いできないのは」である。

(18)　『新編 日本文学全集 9 万葉集④』巻第十五（3729 番歌）の訳は，「心底から 愛しているあなたのことを 思いながら 行くせいでこうもひどく 行きづらいのだろうか」である。

(19)　野村（2002: 32,35）は，「連体形による係り結びは本来カとソによる体制であったものが，カと意味のよく似たところのあるヤが，何らかの形でカのあるべき場所に交代的に侵入し，次第にその領域を拡大して，ついには疑問語以外の地点からすべてのカを追放したと推定することができよう。」，「もともと間投助詞的な性格のナモが，恐らくはソの位置に投入されたのではないかと考えられる。」と述べている。なお，野村（2005: 45）は，「係り結びの消滅」については，「通説によれば，係り結びの崩壊には連体形終止の一般化が与ってもたらしたものと言われる」が，そこには，「間投助詞化した係助詞が自在に脱落した結果として大量の連体形終止が一挙に発生したというストーリー」があったという説を出している。

(20)　日本語学会の学会誌『日本語の研究』の「日本語学界の展望」号には，「現在の係り結び論の中で最も有力な仮説であると思う。」（青木博史「2004年・2005年における日本語学界の展望　文法（史的研究）」『日本語の研究』2-3，2006: 22），「野村剛史の説が支持を広げている」（小柳智一「2010年・2011年における日本語学界の展望　文法（史的研究）」『日本語の研究』8-3，2012: 24）などとある。

(21)　ほかに，たとえば，沖森（2012）の「『ぞ・なむ・や・か』が連体形で結ばれるのは倒置法に由来するものである。／降りたる［連体形］雪ぞ / か → 雪ぞ / か 降りたる［連体形］」（p. 99）とする説（大野 1993 の「倒置説」は，もとの動詞（連体形）が準体法，こちらは連体修飾法。ただし，大野 1998: 224 では，「『か』の係結びは倒置法に起源がある」として，「満ちぬる潮か」を「潮か満ちぬる」と倒置させていう例を挙げている），柳田（2016）の「係助詞『カ』『ヤ』『ゾ』『ナム』の起源を終助詞と見」て，「もともとは／虎か。吠ゆる。／という二文であった。『虎か。』で文は中止しており，「虎であろうか。」という意を表した。そしてこれに『吠えているのは』または『吠えていることだ。』という意味を第二文が補足した。この二文が，やがて，／虎か吠ゆる。／という主述関係と意識されるようになった。」（p. 152）とする説（「補足説」）などもある（野村 1995 の「注釈説」は係り句が注釈，こちらは結び句が補足）（／は改行）。

(22)　小木曽（2015: 73）にも，中古における「連体形終止の文の作品別・係り別用例数」が挙げられている。

(23)　同書の「解説」（屋名池誠執筆）によれば，「本書刊行の時点［1955 初版］で成人の読者が『文語』という名称から思い浮かべるのは『近代文語』［戦前・戦中まで使われていた文語］だったのであり，『文語文法』といえばこの『近代文語』をまちがえずに使うための規範のことだった」（亀井 2017:

230）という。なお，山田孝雄の『日本文法論』(1908）は，その「緒言」に「本論は如何なる時代の言語を対象とせるかと問ふ人あらむ。［中略］其の主とする所は散文に於いて，律語に於いて，現代の標準的記載語として用ゐらるものを対象としたり。」とあり，同書は「古典文法」を論じたものではないようである（『日本文法学概論』には，「現代の文語と目すべきものは，大体書籍雑誌等に於ける論説の如きもの，又所謂口語体以外の雑録類又詔勅法例に用ゐらるゝ文章の如きものをさすと知るべし。」（山田 1936: 11）とある）。一方，大槻文彦の『広日本文典』(1897）は，「例言」で「書中の語法は，宗と，中古言に拠りて立てつ，」と述べている。

(24)　石田（1939）は，「こそ」による係り結びについても，本来終止の意味はないとして，「平安時代に入ると已然形が［本来］終止を表はすものでなく必ず後文のあるべき形式であるのを利用して，たゞ物としもなき余情を残すために，コソ—已然形だけで終へるといふ様式が愛用され」，「之が濫用され模倣される結果，余情を残し得ない様な場合にも用ゐられ，普通の終止と択ぶ所のないものをも生ずるに至つた。」（p. 80）と述べている。一方，沖森（2016: 85）は，「已然形はそこで強く言い切る働きをするのが本来の用法であり，次に続く文との関係で，文脈上から，そのことを契機として次の物事が生じるというように解釈されることが多くなったため，確定条件，特に順接のそれを表すようになった」としている。

(25)　北原（1984: 265）は，「プロミネンスの発達によって，係助詞『こそ』『ぞ』などが用いられなくなったと考えることができる。」と述べているが，小松（2014: 297）は，これを批判し，「プロミネンスは［中略］その部分を際立たせて発音することによって強く印象づけることである。書記テクストでは追跡できないが，人間がことばを使い始めて間もなくから，どの言語を問わず，あまねく使ってきた手法に違いない。それが，係り結びの消域にひと役買ったとは考えがたい。」としている。

(26)　角田（2009）の「大付録 語順の表」によると，角田が調査した 130 の言語中に，「疑問の印」を「質問の焦点の直後」におく言語は，（「(?)」とあるものを含めて）11 ある（トルコ語，ベンガリ語（?），タミル語，カンナダ語，タイ語，マレイ語（「文頭」もあり），グニヤンディ語，ハカル語（?），アイマラ語（?），ケチュア語，コチ語（「普通は V」の直後））。

(27)　ただし，対比の「は」を使って，「昨日」を「質問の焦点」にして，「昨日は，マリーはソムサクを見ましたか。」ということなどはできる。

(28)　室城（2016）は，『伊勢物語』第二三段「筒井筒」にある「風吹けば沖つ白波竜田山夜半にや君が一人越ゆらむ」を取り上げ，係助詞「や」を「疑

問の対象」ととらえて，作品を解釈することを説いている。「『夜半にや』と『越ゆらむ』が係り結びになっているのだから，係助詞『や』によって疑問の対象になっているのは，『夜半に越ゆらむ』の部分である。」，「『夜半』の時間を男とともに共有したいという，もとからの妻の思いが，『夜半にや』と『越ゆらむ』の係り結びの表現にこもっている。」（p. 125）と述べている。

(29)　残りの 3 例は，「その竹の中に，もと光る竹なむ一筋ありける。」（p. 9），「御門，かぐや姫を止めて帰り給はむことを，あかずくちおしく覚しけれど，玉しゐを止めたる心地してなむ帰らせ給ける。」（p. 44），「翁，今年は五十ばかりなりけれども，物思ふには，かた時になむ老になりにけると見ゆ。」（p. 48）である（下線は筆者）。

(30)　田辺正夫『新訂 古典文法』（大修館書店 1986: 97）では，「ぞ」に「……ゾ・……（ハ）ソリャ」という訳を載せ，「文の詞などぞ，昔の反古どもはいみじき。」（徒然草・二二段）を「手紙の文句などはそりゃ，昔の反古紙などには非常に立派なものがある。」と訳している（下線は筆者）。

参考文献

青木和男（2010）「文末表現を軸とする動詞活用の体系的指導」『「日本語学」特集テーマ別ファイル 普及版 文法 2』明治書院

阿久津智（2010）「対照研究の観点としての『文法現象の標示手段』」『立教大学日本語研究』17 立教大学日本語研究会

飯田晴巳（2016）「学校文法 ――〈古典解釈〉の取扱い ――」中山緑朗・飯田晴巳監修『品詞別 学校文法講座 第八巻 古典解釈のための文法』明治書院

石田春昭（1939）「コソケレ形式の本義（下）」『国語と国文学』16-3 東京帝国大学国文学研究室

リンゼイ J. ウェイリー，大堀壽夫・古賀裕章・山泉実訳（2006）『言語類型論入門』岩波書店

大槻文彦（1897）『広日本文典』大槻文彦

大野晋（1993）『係り結びの研究』岩波書店

大野晋（1998）『古典文法質問箱』KADOKAWA（初版 1988『日本語の文法 古典編』角川書店）

小木曽智信（2015）「コーパス活用の勘所 17 日本語史 中古語の文法⑵ 係り結びと連体形終止」『日本語学』34-10 明治書院

沖森卓也編著，山本真吾・永井悦子（2012）『古典文法の基礎』朝倉書店

沖森卓也（2016）「時代別〈古典解釈と文法〉―― 上代語 ――」中山緑朗・飯田

晴巳監修『品詞別 学校文法講座 第八巻 古典解釈のための文法』明治書院
小田勝（2016）「古典解釈と構文論」中山緑朗・飯田晴巳監修『品詞別 学校文法講座 第五巻 助詞』明治書院
小田勝（2018）『読解のための古典文法教室』和泉書院
尾上圭介（1982）「文の基本構成・史的展開」川端善明ほか編『講座日本語学 文法史』2 明治書院
澤瀉久孝（1938）「『か』より『や』への推移 下」『国語国文』8-5 京都帝国大学国文学会
亀井孝（2017）『概説文語文法 改訂版』筑摩書房（初版 1955 吉川弘文館，改訂版 1957 吉川弘文館）
川端善明（1994）「係結の形式」『国語学』176 国語学会
北原保雄（1984）『文法的に考える：日本語の表現と文法』大修館書店
衣畑智秀（2014）「上代から中世の疑問文の様相：データ解釈を中心に」『福岡大學人文論叢』46-1 福岡大学
木下書子（2001）「断りのストラテジーから見た係助詞『なむ』の用法」『尚絅大学 研究紀要』24 尚絅大学
金水敏（2002）「日本語文法の歴史的研究における理論と記述」『日本語文法』2-2 日本文法学会／くろしお出版
桑田明（1969）「係り結びとは」『佐伯梅友博士古稀記念 国語学論集』表現社
小池清治（1967）「連体形終止法の表現効果：今昔物語集・源氏物語を中心に」『国文学 言語と文芸』54（9-5）大修館書店
小西甚一（2016）『国文法ちかみち』筑摩書房（初版 1959 洛陽社，改訂版 1973 洛陽社）
小松英雄（2014）『日本語を動的にとらえる：ことばは使い手が進化させる』笠間書院
小柳智一（2001）「係結についての覚書：学史風」『学芸国語国文学』33 東京学芸大学国語国文学会
近藤要司（2010）「係り結び」高山善行・青木博史編『ガイドブック 日本文法史』ひつじ書房
近藤要司（2017）「中古における疑問係助詞ヤの脱疑問化について」『神戸親和女子大学言語文化研究』11 神戸親和女子大学文学部総合文化学科
佐伯梅友（1988）『古文読解のための文法 上』三省堂
佐伯梅友監修，鈴木康之（1977）『日本語文法の基礎』三省堂
佐伯梅友・鈴木康之監修，日本語文法研究会編（1988）『概説・古典日本語文法』桜楓社

阪倉篤義（1993）『日本語表現の流れ』岩波書店
佐佐木隆（2003）『上代語構文論』武蔵野書院
佐藤稔（1977）「係り結びの把握：中世歌学から山田孝雄まで」『山形女子短期大学紀要』9 山形女子短期大学
鈴木一彦（1981）『時枝誠記 日本文法・同別記 文語編』東宛社（初刊 1950, 1952 中教出版）
鈴木康之（2010）「古典語動詞の活用をどうとらえるべきか：佐伯梅友を再考する」『「日本語学」特集テーマ別ファイル 普及版 文法 2』明治書院
角田太作（2009）『世界の言語と日本語 改訂版』くろしお出版（初版 1991）
土岐留美江（2005）「平安和文会話文における連体形終止文」『日本語の研究』1-4 日本語学会
西田隆政（2009）「竹取物語の会話文の『文末表現』：和文の会話文の文体的特徴をめぐって」『文学史研究』49 大阪市立大学
仁田義雄（1984）「係結びについて」鈴木一彦・林巨樹編『研究資料日本文法⑤ 助辞編（一）助詞』明治書院
野村剛史（1995）「カによる係り結び試論」『国語国文』64-9 京都大学文学部国語学国文学研究室
野村剛史（2001）「ヤによる係り結びの展開」『国語国文』70-1 京都大学文学部国語学国文学研究室
野村剛史（2002）「日本語研究　連体形による係り結びの展開」上田博人編『日本語学と言語教育』（シリーズ言語科学 5）東京大学出版
野村剛史（2005）「中古係り結びの変容」『国語と国文学』82-11 東京大学国語国文学会
野村剛史（2011）『話し言葉の日本史』吉川弘文館
半藤英明（2003a）『係助詞と係結びの本質』新典社
半藤英明（2003b）『係結びと係助詞：「こそ」構文の歴史と用法』新典社
舩城俊太郎（1995）「係結び」山口明穂編『国文法講座 3　古典解釈と文法：助詞の機能』明治書院
舩城俊太郎（2013）『かかりむすび考』勉誠出版
松尾捨治郎（1928）『国文法論纂』文学社
松下大三郎（1928）『改撰標準日本文法』紀元社
室城秀之（2016）「時代別〈古典解釈と文法〉── 中古語 ──」中山緑朗・飯田晴巳監修『品詞別 学校文法講座 第八巻 古典解釈のための文法』明治書院
森重敏（1971）『日本文法の諸問題』笠間書院
柳田征司（2016）『日本語の歴史 6 主格助詞「ガ」の千年紀』武蔵野書院

山内洋一郎（2003）『活用と活用形の通時的研究』清文堂出版
山田孝雄（1908）『日本文法論』宝文館
山田孝雄（1936）『日本文法学概論』宝文館
吉田茂晃（2005）「“結び”の活用形について」『国語と国文学』82-11 東京大学国語国文学会

（原稿受付　2018 年 6 月 28 日）

〈論　文〉

共同研究〈諸文化圏・諸言語圏の呪い・穢れ・占い・迷信〉

ヒンディー文学における「呪い」と「予言・夢」

── 叙事詩『ラーム チャリト マーナス』で 16 世紀のトゥルスィーダースが詠い訴えようとしたこと ──

坂　田　貞　二

Abstract

Rām carit mānas or *The Lake of Rama's Deeds* is a Rama Story sung by Tulsīdās of the 16th century in Hindi language. This Rama story is still sung and dramatized in North India on various occasions including the commemoration of Rama's birth day.

Rama was born as an incarnation of God Vishnu [I-201]. But responding to the wish of his mother, he also showed himself as a normal human baby [I-202].

In this paper, the portions including curses and prophecies/dreams are shown first, and then the roles they play in the work are examined.

Curses are often removed by the mercy of Rama: Ahalya was cursed by her learned husband and changed into a stone, but when she touched the feet of merciful Rama, she regained the human form [I-210]. Prophecies will bring the story ahead as expected: Trijata serving the demon Ravana told Sita in prison about the dream she saw, and Rama came to rescue her soon [V-11-1, V-12-1]. We observe here the dreams come true as the prophecies.

キーワード：ヒンディー語・文学，トゥルスィーダース，ラーマ物語，呪い，予言

Ⅰ　はじめに：本稿の目的・構成・このラーマ物語の概要など

本稿は，16 世紀のヒンディー語でトゥルスィーダースが詠ったラーマ物語 *Rām carit mānas*（『ラーマの行いの湖』）という作品のなかで，「呪い」と「予言（夢）」がどのような場面で現われ，それらがどのような役割を担うかを考察するものである。

本稿を，つぎのような手順で進める。

Ⅰ　はじめに，トゥルスィーダースによるこの大叙事詩の概要を示す。
　なお本稿では以降，*Rām carit mānas* をその邦訳題の『ラーマの行いの湖』と表記することが多い。

Ⅱ　*Rām carit mānas*（『ラーマの行いの湖』）に現れる「呪い」が誰から誰になされたのか，そこでの「予言（夢）」を誰がした（見た）のかの事例を，作品の引用によって示す。

Ⅲ　このラーマ物語で，「呪い」と「予言（夢）」がどのような役割・意義を持つかを考察する。

Ⅳ　本稿の成果を確認し，未解決の課題を示す。

『ラーマの行いの湖』全七編の概要（粗筋）

論を進めるときに取りあげることがらの背景がわかるよう，『ラーマの行いの湖』の概要・粗筋をあらかじめ示しておく。

太字は，「**呪い**」と「**予言（夢）**」に関連することがらである。

また［ ］内の数字は，該当部分のドーハーとチャウパーイー（いずれも後述）の番号である。

本稿が依拠する『ラーマの行いの湖』の底本は，下の文献である。

Poddār, Hanumānprasād（ed）. *Śrīrāmcaritmānas*（*saṭīk*）12th edi-

tion, Gorakhpur: Gītā Pres, 1961. ⇒ H. ポッダール（編）『聖なるラーマの行いの湖（注釈付き）』。

本稿はまた，H. ポッダール（編）の底本をプラサードが英訳した文献も参照する。

Prasad, R. C. (edited and translated into Hindi and English), *Shri Rama Charita Manasa* (*The Holi Lake of the Acts of Rama*), Delhi: Motilal Banarsidass, 1990. ⇒プラサード編・訳『聖なるラーマの行いの湖』。

なお⇒以下に記したのは，筆者が文献の編著者と題の概略を邦訳したものである。

大叙事詩『ラーマの行いの湖』は主に，叙事詩の進行を示す二行詩ドーハーとその詳細を詠う四脚詩チャウパーイーから成っている。

例を第 I 編「幼年の巻」の概要・粗筋から挙げると，ドーハーを［I. 122］のように記し，それが典拠として第 I 編のドーハー 122 番にあることを示す。その邦訳例は，

魔物の二人は生まれかわり 強く恐ろしき戦士になる。

みなが知るランカー島の クンバカルナと**ラーヴァナに**。［I. 122］

となる。ドーハーはこの作品では，1 行が 13 拍＋11 拍から成る 2 行詩である。

チャウパーイーは，各脚（パーイー）が 16 拍から成る 4（チャウ）脚の詩である（ただしこのラーマ物語では，4 脚が 2 行で記されることが多い）。その邦訳例を挙げると，

バラモン僧らに呪われて，聖仙の子二人は魔物の黒き身体で生まる。

ヒランニャカシプとヒランニャークシャ，その名は広く知れわたる。［I. 122.3］

となる。［ ］の数字は，それが第 I 編ドーハー 122 番のチャウパーイー 3

番であることを示す。

以下に『ラーマの行いの湖』の概要・粗筋を，はじめの第Ⅰ編から結末の第Ⅶ編までの順で示す。

第Ⅰ編　「幼年の巻」

・シヴァ神が妃のパールバティーに，このラーマ物語を語り聞かす［I. 120 gha］。

・**ラーヴァナら**は聖仙の家系に生れたが，**僧の呪いで羅刹に**［I. 122.3, I. 122］。

・聖ラーマがコーサラ国の都アヨーディヤーで，ダシャラタ王とカウサルヤー妃から長子として降誕［I.192.1］。

・ガウタマ仙の妻**アハルヤーは，夫に浮気を呪われ石に**されるが，**彼女がラーマの足を拝し**たので，救済され**石から人の姿に**なる［I. 210, I. 211.1］。

・ヴィシュヴァーミトラ仙はラーマとラクシュマナを連れて，ジャナカ王が治めるヴィデーハ国の都ミティラーに行く［I. 212.3］。

・ラーマはその都での弓取り式で勝利し，スィーター姫と結婚［I. 325.4］。

・ラーマ王子の弟三人とスィーター妃の妹三人も結婚し［I. 325. 2, 3］，新婚の四組は喜びに沸くアヨーディヤーの都に還る［I. 351］。

第Ⅱ編　「都アヨーディヤーの巻」

・ラーマ王子を皇太子に任ずる儀式の準備がはじまる［II. 2］。

・バラタ王子の母カイケーイー妃は，自分の子バラタを皇太子にするために，長兄のラーマ王子を 14 年のあいだ森に追放すべしと主張。ダシャラタ王はカイケーイー妃に命を救われたときに，彼女の願いはなんでも叶えると約束したので，それを拒めない［II. 42.1］。

・ラーマ王子とスィーター妃は，兄ラーマ王子に尽したいと願うラク

シュマナを従えて森に［II-79］。都の人々は三人の不在を嘆く［II. 86］。

・ダシャラタ王は勇者ラーマが林棲したのを悲しみ，世を去る［II. 155］。

・**バラタらがラーマ王子を訪ねくる夢をスィーター妃が見て，ラーマに語る。**［II. 226.2］。

・バラタらが森にきてラーマ王子に会い，アヨーディヤーに戻って執政するよう懇願［II-268］。しかしラーマは都に戻ろうとしない［II. 318.4］。

・バラタはラーマから預かった履物を玉座に置き，国を治める［II. 323］。

第Ⅲ編　「森林の巻」

・ラーマ一行は森林のなかのパンチャヴァティー庭園に住む［III. 21.2］。

・［**羅刹ラーヴァナが妃スィーターを攫いに来るのを予測したラーマが，**］**妃を火神に委ね，森には彼女の幻影だけを置く**［III. 24.1-2］。

・羅刹マーリーチュが金色の鹿に化けスィーターを魅惑。彼女の願いでラーマが鹿を追い弟のラクシュマナも様子を見に［III. 27.4, III. 28.3］。

・その留守中にラーヴァナがスィーターを攫う［III. 28］。

・戻って来たラーマは，ラーヴァナと戦って傷ついた禿鷲ジャターユからそのことを聞く［III. 30］。

第Ⅳ編　「猿王が治める国キシュキンダーの巻」

・ラーマ王子はスィーター妃を助けに行く道で，猿国の武将ハヌマーンに邂逅。ラーマはその国の王弟スグリーヴァと親しくなる［IV. 4.4］。

・ヴァーリ王に苦しめられるスグリーヴァをラーマが王位に

［IV. 11］。

・猿国の武将ハヌマーンと部下の猿たちが，スィーター妃を探しに行く［IV. 21, 22］。

第Ⅴ編　「美麗の巻」

・ハヌマーンが空を飛び，ランカー島に入る［V. 1,2,3］。

・ハヌマーンはアショーカ・ヴァーティカー（無憂樹の庭）で，攫われたスィーター妃が悲しむさまを見る［V. 6,7,8］。

・**羅刹の下女トゥリジャターが，ラーマが来てスィーターを救出した夢を見たとスィーターに語り聞かせる**［V. 11. 1-4］。

・ハヌマーンがその庭でラーマから預かった指輪を投げると，スィーターはそれを拾う［V. 12,13,14］。

・スィーターはハヌマーンに求められ，ラーマに渡す頭飾りを託す［V. 27.1］。

第Ⅵ編　「ランカー島の巻」

・ラーマとその軍団が橋を渡って，ランカー島に踏みこむ［VI. 4,5］。

・羅刹ラーヴァナの妻マンドーダリーが，ラーマに降伏してスィーターを返すよう夫に勧めるが，ラーヴァナは聞きいれない［VI. 6,7］。

・ラーヴァナが妻の言を無視するあいだに，ラーヴァナ軍とラーマ軍の戦闘がはじまる［VI. 40,41］。

・戦闘のさまを**側女トゥリジャター**から聞き，スィーターが心配。**側女がこう言う（予測する）**，「心臓を射れば羅刹は倒れる」と［VI. 99］。

・戦さでラーマがラーヴァナを成敗する［VI. 102, V. 103.1-3］。

・空飛ぶ船でラーマとスィーターらはアワド国に凱旋する［VI. 120ka, kha］。

第Ⅶ編　「大団円の巻」

・ラーマ王子の帰還を，バラタと母たちや都のみなが歓迎［VII. 5-8 ka］。
・ラーマ王子が王位に就く［VII. 12.1-4］。
・ラーマ王の治世で国が平安に［VII. 20, 21, 22, 23］。
・ラーマ王に都にいるスィーター妃が仕え，王と妃に二人の王子クシャとラヴァが授かる［VII. 24, 25.3］。
・ラーマ王が民に訓示し，民は王に感謝する［VII. 42, 44, 47］。
・宮殿を出たラーマは，弟たちと郊外のマンゴー園に行く［VII. 50.3］。
・ナーラダ仙がそこに来て，ラーマの徳を讃える（やがてラーマは他界するが，かれの他界や後継の王の名は言及されていない）［VII. 50］。

以上が『ラーマの行いの湖』全七編の概要・粗筋である。

Ⅱ　*Rām carit mānas*（『ラーマの行いの湖』）に現れる「呪い」と「予測・予言（夢）」の事例

「呪い」は現代のヒンディー語では，śāp（シャープ）とされることが多い。

その語はカレヴァエルトら編の『ラーム・チャリット・マーナスの語彙索引』* においては，śrāpa（シュラーパ），śrāpu（シュラープ），sāpa（サーパ），sāpā（サーパー）の形で表れる。

*W. M. Callewaert & P. Lutgendorf, *Rāmcaritmānas Word Index,* New Delhi: Manohar Publishers and Distributors, 1997.

「予言」にあたるヒンディー語の語彙は，bhaviṣya-vāṇī（バヴィシャヤ・ワーニー）であるが，そういう語彙はカレヴァエルトらによる上掲の

索引に載っていない。しかし「予言・予測」に近い現代のヒンディー語にsapnā（サプナー，夢）がある。その関連語としてsapana（サパナ），sapanā（サパナー），sapanem̐（サパネム），sapane（サパネー），sapanehūm̐（サパネーフーム）の諸形で見られることが，カレヴァエルトらの索引でわかる。

国を追われて森に住む**ラーマ王子にスィーター妃が「あなたの弟のバラタ王子が会いにきた夢を見ました」と言い，羅刹の下女トゥリジャターが攫われたスィーター妃に「ラーマ王子があなたを救いにきた夢を見ました」と言う。**それらの夢が『ラーマの行いの湖』では，直後に実現している。

また，「予言」とも「夢」とも記されていないが，それらしい例が『ラーマの行いの湖』の第Ⅲ編「森林の巻」で，ラーマが妃のスィーターを火神に委ね，そこに彼女の幻影だけを置くという場面にある［III. 24］。それは「予言」や「夢」に近い「予視」と考えられる。羅刹ラーヴァナが妃のスィーターを攫いに来るのを**予視した**ラーマが，妃を火の神に委ねたのである。

本稿ではśāp（シャープ），sapnā（サプナー）とそれらの関連語を含む例を，『ラーマの行いの湖』の第Ⅰ編「幼年の巻」から第Ⅶ編「大団円の巻」まで順に示す。そのさいśāp（シャープ），sapnā（サプナー）などをすべて，「呪い」，「夢・予視」などの邦語とその変化形で掲げる。ただし必要な場合は，原語の綴りをローマ字転写で示すこともある。

以下に『ラーマの行いの湖』で「呪い」と「夢・予言・予視」の語を含む主要な場面を，その邦訳で示す。

なお邦訳では，「呪い」と「夢・予言・予視」に該当する部分を**太字で示す**のを原則とする。

第Ⅰ編の「幼年の巻」から。

1．魔物ラーヴァナが呪いのなかで誕生する場面は，次のように記されている。

バラモン僧らに呪われて，聖仙の子二人は魔物の黒き身体で生まる。

ヒランニャカシプとヒランニャークシャ，その名は広く知れわたる。［I. 122.3］

魔物の二人は生まれかわり　強く恐ろしき戦士になる。

みなが知るランカー島の　**クンバカルナとラーヴァナに。**

［I. 122］

ランカー島を支配する羅刹ラーヴァナらについて，のちにラーマが戦う相手の素性をここで説明しているのである。

2．ガウタマ仙の妻アハルヤーはインドラ神の誘惑に乗ったため，夫に呪われ石にされたが，ラーマの御足をいただいて人の姿に戻れる。その場面はこう詠われている。

ガウタマ仙の妻アハルヤー　呪いで石になりここに。

ラーマの御足で石も人に　勇者ラーマは彼女に情けを。［I. 210］

第Ⅱ編の「都アヨーディヤーの巻」から。

1．異母弟バラタの母カイケーイー妃と父ダシャラタ王の約束があるので，ラーマらは 14 年のあいだ都を捨てて森に住むことになる。

その間に父ダシャラタ王は，ラーマと別れた悲しみから自分が若いときに犯した過ちを想い出す。その場面はこう詠われている。

ダシャラタ王は大いに嘆く，一夜が一ユガ（宇宙年）のごとく長く思わる。

盲目の苦行者*に**われは呪われた**と，**カウサルヤー妃に語る。**

*若き日のダシャラタが誤って弓矢で射た盲目の苦行者。［II. 155.2］

2．バラタらがラーマ王子を訪ねくる**夢をスィーター妃が見てラーマに言う（= 予言する）**さまは，こう描かれている。

ラーマは夜明けに目を醒ます，**妃は夜中に見た夢をラーマに語る。**

みなを引き連れバラタが来る，ラーマと離れてバラタは悩み。

［II-226.2］

そしてじきに，バラタらが森にきてラーマに会う［II.232］。

第Ⅲ編の「森林の巻」から。

1．ラーマがスィーター妃を火の神に委ねる場面が，つぎのように詠われている。羅刹に攫われるのを防ぐ（**呪いを避ける**）方法としてラーマが pāvaka（清めるもの，火）や anala（火の女神）にスィーター妃を委ね，外界には彼女の幻影だけを置くのである。

聞け 愛しく貞節な妃よ，われは人としていま遊戯（ゆげ）をなす。

汝を火神（pāvaka）**の懐に委ねる**，われが悪鬼を滅ぼすまで。

［III. 24.1］

ラーマがかく言うと妃は，ラーマの御足を胸に**火**（anala）**に入る**。

妃はそこに自らの幻影を置く，美徳と品性をもち慎み深き幻影を。

［III. 24.2］

2．羅刹ラーヴァナの伯父マーリーチュが，美しい鹿に化けてラーマらが住む森にくる。スィーターの願いでそれをラーマが追い，ラーマの呼ぶ声がするのでラクシュマナもそこに行く。

鹿を追いてラーマは走る 弓矢をしかと握りしめて。

鹿は振りかえり見てかく思う ラーマの姿を拝せしわれは幸いと。

［III. 26］

しかしマーリーチュはラーマに殺されたので，怒った羅刹ラーヴァナは，ラーマらが留守のあいだにスィーター妃を攫う。その場面はこう描かれている。

怒り狂いしラーヴァナは スィーター妃を攫い馬車に座る。

天空の道を馬車で急げども 罪の意識で馬車を御せず。［III. 28］

ここで攫われたスィーター妃が，彼女の幻影にすぎなかったことは，［III. 24.1-2］に示した通りである。

3．ラーマは，攫われた妃スィーターの行方を捜すうちにさまざまな人や鳥や悪魔などに遭う。以下は巨軀の羅刹カバンダに遭ったときのラーマの行為とそれへのカバンダの反応である。

深き森には草木が茂り，森に鳥 鹿 象 獅子が数多 住む。

ラーマは頭のないカバンダを倒す，**羅刹は受けた呪いを死に際に語る**。

［III. 33.3］

僧ドゥルワーサーの呪いを受けるも，ラーマの足を拝しわが罪障消えむ。

ラーマは詠い羅刹にかく伝う，僧に背く者をわれは好まぬと。

［III. 33.4］

ここでもラーマは倒した羅刹に感謝されつつも，僧の偉大さを説く。

第Ⅳ編の「猿王が治める国キシュキンダーの巻」から。

1．攫われた妃のスィーターを探すうちにラーマは，猿王が治めるキシュキンダー国で兄の猿王ヴァーリに虐められる弟のスグリーヴァに遭う。

猿の弟の悩みとそれへのラーマの反応が，つぎのように詠われている。

兄ヴァーリは悪魔**の呪いで**ここに来られぬ，されどわれ弟は兄を恐れる。

猿スグリーヴァのこの苦痛を知り，ラーマの大なる両の手が震える。

［IV.6.7］

こういう背景のもとにラーマは，凶暴なヴァーリを退治しスグリーヴァを王位につける。そしてその武将ハヌマーンが，ラーマらの一行を扶けてスィーター妃を救出する。

第Ⅴ編の「美麗の巻」から。

1．羅刹ラーヴァナの下女トゥリジャターは，「ラーマと猿がランカーに来てスィーター妃を救出した夢を見ました，夢はじきに実現します」とスィーター妃に言う。**この夢は実質的に予言**である。

夢のなかで猿がランカーを燃やし，羅刹の軍勢を殺しつくす。

十の頭を持つ羅刹に軍勢なく，頭に毛がなく二十の手も折れて。

［V. 11.2］

かくして羅刹王ラーヴァナはあの世に，ランカー国は弟ヴィービーシャンの手に。

国中に響くラーマの賞讃，そして**ラーマはスィーター妃を迎えに**。

［V. 11.3］

その通りになることは，このラーマ物語の第 VI 編と第 VII 編に詠われている。

第Ⅵ編の「ランカー島の巻」から。

1．ラーヴァナとラーマの戦の進展に心配するスィーター妃に，トゥリジャターは［VI.99.7 後半］のチャウパーイーで次のように言う。

妃よ しかと聞きなされ，矢が心臓を射ればラーヴァナは死ぬ。

そしてラーヴァナは**トゥリジャターが予言した**ように，ラーマに射られて死ぬ［VI. 103.2 後半］。

第Ⅶ編の「大団円の巻」から。

1．ラーマの信徒が師を無視したためにシヴァ神が呪いをかけてその者を烏にするが，情け深い師はそれを見て悲鳴をあげる。困惑する師と恐れる烏のさまにシヴァ神は，自分がかけた呪いを解く。こういう一連のことが，つぎのように詠われている。

ラーマ信徒のわれは一心に シヴァ神の御名を唱え続ける。

そこへローマシャ師が来たれども 高慢なわれは師に敬礼せず。

［VII. 106 ka］

シヴァ神は呪いてわれを人から烏に，それを見てローマシャ師は悲鳴。

烏のわれが恐れるさまに，シヴァ神はひどく困惑せり。［VII. 107 ka］

以上に，16 世紀のヒンディー語叙事詩『ラーマの行いの湖』に現れた呪いと予言・予視を含む部分を抽出・邦訳して掲げた。

Ⅲ　『ラーマの行いの湖』における「呪い」と「予言（夢）」の意義の考察

この第Ⅲ章では，A. 節で「呪い」を取りあげ，B. 節では「予測・予視・夢」を取りあげる。

A．節の「呪い」においては，それが誰により誰にかけられたか，呪われた者がそれにどう対応したかを考察する。

B．節の「予測・予視・夢」においては，誰がどういう状況で，どういう「予測・予視」をし「夢」を見たのかを考察する。

A. 節と B. 節の考察の資料として，『ラーマの行いの湖』の詩の邦訳を（　）内に掲げる。

A．「呪い」は誰により誰にかけられ，「呪われた者」はそれにどう対応したか。

この節では呪いが現れた位置と呪いの要点を明らかにするために，**叙事詩の巻名**，**呪った者**，**呪われた者**，それに**呪われた者が呪いにどう反応したか（結果としてどうなったか）**の四つの事項を太字で示す。

第Ⅰ編「幼年の巻」の 1. において，魔物ラーヴァナが誕生する場面では**バラモン僧らが 聖仙の子二人を呪い，呪われた者は羅刹としてこの世に生まれる**（バラモン僧らに呪われて，聖仙の子二人は魔物の黒き身体で生まる。ヒランニャカシプとヒランニャークシャ，その名は広く知れわたる [I. 122.3]）。

そしてその羅刹ラーヴァナは，物語の終末でラーマに滅ぼされる。

同じ第Ⅰ編の 2. において，**アハルヤーは 僧である夫の呪いで石に**されるが，**ラーマの足を拝したことで妻アハルヤーに戻れる**（ガウタマ仙の妻

アハルヤー 呪いで石になりここに。**ラーマの御足で石も人に** 勇者ラーマは彼女に情けを［I. 210］）。ラーマはここで，呪いを解く力を持つ情け深い人とされる。

第Ⅱ編「都アヨーディヤーの巻」の 1. において，ラーマの父**ダシャラタ王は**若いときに誤って矢で射た**盲目の苦行者に呪われ，のちに夜にうなされる**（**ダシャラタ王は**大いに嘆く，一夜が一ユガ（宇宙年）のごとく長く思わる。**盲目の苦行者に呪われたと，カウサルヤー妃に語る**［II. 155.2］）。ここでは，大王もときに過ちを犯すとされている。

第Ⅲ編「森林の巻」の 3. において，攫われたスィーター妃を探しもとめるラーマは，**憤怒する僧の 呪いで頭を切りおとされた羅刹カバンダ**を成敗する。かれは死に際に僧から受けた呪いをラーマに語る（**僧ドゥルワーサーの呪い**を受けるも，**ラーマの足を拝し**わが**罪障消えむ**。ラーマは詠い羅刹にかく伝う，僧に背く者をわれは好まぬと［III. 33.4］）。ここでラーマは呪われたカバンダを倒すが，かれを涅槃に送ったことでかれ自身に感謝される。

第Ⅳ編「猿王が治める国キシュキンダーの巻」の 1. では，その国の**凶暴な猿王が悪魔に呪われ**ている。そこに来かかったラーマが凶暴な猿王を倒して弟のスグリーヴァを王位につける（兄ヴァーリは悪魔**の呪いで**ここに来られぬ，されどわれ弟は兄を恐れる［IV. 6.7 の前半］）。

ラーマは困惑する者を扶けることで，結果として援助者・仲間をつくる。

（第Ⅴ編の「美麗の巻」と第 VI 編の「ランカー島の巻」では，「呪い」という語が重要な役割を果たしている例が見当たらない。）

第Ⅶ編「大団円の巻」の 1. において，ラーマ信徒が自分の師匠に敬意を払わなかったためにシヴァ神に呪われる場面で，**信徒を 呪ったのはシヴァ神**である。呪われて信徒は，鳥になる（**シヴァ神は呪いてわれを人から鳥に**，それを見てローマシャ師は悲鳴）。それを哀れと思った**シヴァ神は呪いを解く**（鳥のわれが恐れるさまに，**シヴァ神はひどく困惑せり**［VII.107 ka］）。

このように見てきたことをまとめると，つぎのことが指摘できよう。

① 呪う主体で最も多いのは，僧（バラモン，苦行者も含む）である。悪魔やシヴァ神も，ときに呪う。

② 呪われるのは，怒りにふれた人または凶暴な猿王である。

③ 呪われる理由は，呪いの対象が悪行や暴虐をなすこと，人の道に反する行為をなすことなどである。

B．これから起きることを「予測・予視」する「夢」を，誰がどういう状況で見るか。

この節では夢が現れた位置と夢の要点を明らかにするために，**叙事詩の巻名**，**夢を見た者**，**夢の内容**，それに**夢の結果がどうなったか**の四つの事項を太字で示す。

なお「予測」「夢」と明示されていないが，実質的にそれらに該当する場面もこの節で考察する。

『ラーマの行いの湖』で夢（またはそれに準ずることがら）が重要な役割を果たす場面は，第Ⅱ編の「都アヨーディヤーの巻」，第Ⅲ編の「森林の巻」，第Ⅴ編の「美麗の巻」それに第 VI 編の「ランカー島の巻」の四編だけに見られる。

第Ⅱ編「都アヨーディヤーの巻」の 2. で，**バラタらが森に棲むラーマ一行を訪ねくる夢を スィーター妃が見て** それを**ラーマ王子に語る**（ラーマは夜明けに目を醒ます，**妃は夜中に見た夢をラーマに語る**。みなを引き連れバラタが来る，ラーマと離れてバラタは悩みし［II. 226.2］。）

その夢がすぐに現実になることは，物語の［II. 232］に詠われている。

第Ⅲ編「森林の巻」の 1. で，**ラーマは 妃スィーターを**ラーヴァナに攫われないよう**火神に委ね**，**外界には彼女の幻影を残す**（聞け 愛しく貞節な

妃よ，われは人としていま遊戯（ゆげ）をなす。**汝を火神**（pāvaka）**の懐に委ねる**，われが悪鬼を滅ぼすまで［III. 24.1］。ラーマがかく言うと妃は，ラーマの御足を胸に**火**（anala）**に入る**。**妃はそこに自らの幻影を置く**，美徳と品性をもち慎み深き幻影を［III. 24.2］）。

第Ⅴ編「美麗の巻」の 1. で，ラーヴァナの下女でスィーター妃の世話をする**トゥリジャターが，ラーマがスィーターをじきに救いにくるという夢を見た**と**スィーターに語り**，物語の終局部でその通りになる（**夢のなかで猿がランカーを燃やし**，羅刹の軍勢を殺しつくす。十の頭を持つ羅刹に軍勢なく，頭に毛がなく二十の手も折れて。［V. 11.2］）。

第Ⅵ編「ランカー島の巻」の 1. で，戦の模様を案じる**スィーター妃にトゥリジャターが 予測して**こう語る（妃よ しかと聞きなされ，矢が心臓を射ればラーヴァナは死ぬ［VI. 99.6］）。しかしラーヴァナが胸中にスィーター妃の姿を収めているので，ラーマは羅刹の胸を矢でかれの胸を射られない［VI. 99.7］。そうと知ってトゥリジャターは（ラーヴァナは十の頭の数多を射落とされば，取り乱してスィーター妃の姿を忘る［VI. 99］）と言った。こうしてラーマがラーヴァナを射殺したことは，本稿の第Ⅱ章に示した通りである。

以上に見てきたことをまとめると，つぎのことが指摘できる。

① 夢を見る主体は，ラーマの平安を祈るスィーター妃や彼と妃の幸いを願うラーヴァナの下女トゥリジャターである。

② 夢の聞き手は，ラーマやスィーター妃である。

③ 夢はすべて実現し，「夢」が実質的に「予測・予視」になっている。

なおここで注目すべきは，物語では「夢」とも「予測」とも書かれていないが，第Ⅲ編「森林の巻」の 1. でラーマが 妃スィーターをラーヴァナに攫われないよう火神に委ねる場面である。外界に残されたスィーター妃

は幻影にすぎないので，その幻影がラーヴァナに攫われてもスィーター妃は穢されなかった。

『ラーマの行いの湖』の第Ⅶ章の結末で，スィーター妃が即位したラーマ王に仕え，王と妃に二人の王子クシャとラヴァが授かり，一家は平穏に暮らせたとなっているのは，攫われたスィーター妃がその幻影にすぎなかったからである［VII-24, 25-3］。ラーマがスィーター妃を火神に委ねて護ってもらったのには，羅刹ラーヴァナが妃のスィーターを攫いにくることをラーマが察知・予測していたからであろう。

これはヴァールミーキ編とされる『ラーマーヤナ』の結びとは，大きく異なる。ヴァールミーキ編の第七巻では，民から潔白が疑われたスィーター妃がラーマによって都を追われ（45 章），彼女は最後に土に呑まれてこの世を去っている（97 章）。ヴァールミーキ版の第三巻で羅刹ラーヴァナに攫われたスィーターは，彼女の幻影ではなく彼女自身だったからである。

Ⅳ　本稿の成果，将来の課題

本稿はこれまで，『ラーマの行いの湖』に現れる「呪い」と「予測・夢」について，つぎのことを明らかにしてきた。

・「呪い」の多くはバラモン僧やシヴァ神によって，道に反する行為をなした者や悪魔にかけられるが，呪いはそれをかけられた者らを哀れに思った神の化身にして情け深い英雄のラーマ，多くの人の信心を集めていたシヴァ神によって解かれる。

・「予測」や「夢」の多くは，このラーマ物語の主人公ラーマやその妃スィーターに好意を寄せる者が行ったり見たりする。そしてそれらが，じきに実現する。

ところで本稿の第Ⅲ章を結ぶにあたって筆者は，『ラーマの行いの湖』

の結末部分が全インドで広く知られている古典叙事詩『ラーマーヤナ』と大きく異なると記した。その理由・由来をここで確認しておきたい。

『ラーマの行いの湖』を創るにあたってトゥルスィーダースが参照したラーマ物語について，ルトゲンドルフは先行の研究を要約しながらつぎのような趣旨を述べている。[Lutgendorf. *The Life of a Text: Performing the* Rāmcaritmānas *of Tulsidas,* Delhi: Oxford University Press, 1994. p. 7]：

> ヴァールミーキの古典的な作品の影響を受けていることは当然だが，トゥルスィーダースはそれとはかなり離れた物語を創っている。ヴァールミーキのとは異なるサンスクリット語のテクストから影響を受けているからだろう。例として挙げられるのは，『バーガヴァタ・プラーナ』からラーマの幼年時の描写，『[ジャヤデーヴァの戯曲] プラサンナラーガヴァ』からラーマとスィーターが婚前に花園で出遭う場面，『アディヤートマ・ラーマーヤナ（最高我のラーマーヤナ）』からはスィーターの「幻影」を作って羅刹ラーヴァナの攻撃に備える場面などである。トゥルスィーダースは『ラーマの行いの湖』を，ヴァールミーキ版とは別物語にした。

試みにスィーターの「幻影」を作る場面を，ヴァールミーキ編，『アディヤートマ・ラーマーヤナ』，『ラーマの行いの湖』の三つのラーマ物語について比較したのが，つぎの表である。なお『アディヤートマ・ラーマーヤナ』は作者不詳で 15 世紀末か 16 世紀はじめに書かれたらしい。

諸ラーマ物語におけるスィーター妃の幻影化

（幻影と火神を太字で）

ヴァールミーキ編の『ラーマーヤナ』	『アディヤートマ・ラーマーヤナ』	『ラーマの行いの湖』
Vaidehī（ヴァイデーヒー（ヴィデーハ国の王女スィーター妃）をラーヴァナは車に乗せた（ここでのスィーターは，māyā 幻影ではなく，妃そのもの）。[III. 49.20]	ラーマはラーヴァナの奸計を予知し，妃のスィーターにこう命ずる，「**汝は māyā（幻影）を小屋に残**し，ラーヴァナが滅ぼされるまで **āga 火のなかにおれ**。」ラーマの言を聞きスィーター妃は，**幻影**を小屋に残し姿を消す。[III. 7.1-6]	「聞け 貞節な妃よ，われはいま遊戯（ゆげ）をなす。悪鬼を滅ぼすまで **汝を火神**（pāvaka）**の懐に委ねる**。」妃はラーマの御足を胸に抱き **火**（anala）**に入る**，そこに自らの **māyā（幻影）を残して**。[III. 24.1-2]

上表の典拠とした文献

ヴァールミーキ編の『ラーマーヤナ』

中村 了昭（訳）『新訳 ラーマーヤナ（1)-(7)』平凡社 東洋文庫，2012・2013。⇒邦訳と詳細な解説を載せている。

Rāmnārāyaṇdatt'rām', *Śrīmadvālmīkīya Rāmāyaṇa*（*Sacitra, Hindībhāṣāntarasahit*）*I-II*, 11th ed., Gorakhpur: Gītā Pres, 1992. ⇒ヴァールミーキ編の原文にヒンディー語訳と絵を付したもの。

『アディヤートマ・ラーマーヤナ』

Baij Nath, Rai Bahadur Lala（tr.), *The Adhyatma Ramayana,* Allahabad: The Pāṇini Office, Bhuvaneśvari Āśrama, Bahadurganj, 1913. ⇒英訳のみを掲載。

Munilāl（Hindi translation), *Adhyātmarāmāyaṇa Hindī Anuvādsahit,* Gorakhpur: Gītā Pres, 1967 ⇒各ページの左側にサンスクリッ語の原文を，右側にそのヒンディー語の現代語訳を載せている。

『ラーマの行いの湖』

Poddār, Hanumānprasād（ed）*Śrīrāmacaritamānasa*（*saṭīk*）12th edition, Gorakhpur: Gītā Pres, 1961. ⇒ H. ポッダール（編）『聖なるラーマの行いの湖（注釈付き）』。

前ページの表で明らかなように，ヴァールミーキ編でラーヴァナに攫われたのはスィーター妃自身なので，物語の結末で彼女がラーヴァナに汚されたのではないかと民に疑われる。それで妃はラーマによって都から追われ，最後に一人で土に呑みこまれる。

ところが『アディヤートマ・ラーマーヤナ』と『ラーマの行いの湖』でのスィーター妃は，ラーヴァナに攫われたのが彼女の幻影なので，攫われた彼女の貞節に疑いの余地がない。したがってスィーター妃は，都で平穏に暮らし二人の男子を授かる。

また妃が火に入り幻影だけを森に残すことについて，『ラーマの行いの湖』は『アディヤートマ・ラーマーヤナ』の表現の細部まで類似している。ほんの少しまえに書かれた『アディヤートマ・ラーマーヤナ』は，トゥルスィーダースに大きな源泉を提供したのであろう。

それとの関連でもう一つ注目すべきは，スィーター妃の父ジャナカ王がヴィシュヴァーミトラ仙と同行のラーマとラクシュマナ兄弟に，スィーター妃は土の畝から生まれたが，彼女を自分の長女として育てたと説明するヴァールミーキ編のくだりが［I. 66.14］『ラーマの行いの湖』には全く見当らないことである［Vaudeville I. p. 118, Poddār（ed）. *Śrīrāmacaritamānasa* I. 341-342］。このことと，スィーター妃の幻影がラーヴァナに攫われたことが，物語の結末でスィーター妃が都で平穏に暮らして男子二人を授かったとするうえで大きく働いているようである。

その一方で，『ラーマの行いの湖』が重要な点で『アディヤートマ・ラーマーヤナ』と異なる解釈をしていることがらがある。その一例に，婚前のラーマ王子とスィーター姫が花園で遭う場面が『ラーマの行いの湖』にあるが，『アディヤートマ・ラーマーヤナ』にそういう場面はない。

そこでヒンディー語を学ぶわたしとしては，『ラーマの行いの湖』を中心にしてラーマ物語展開の全貌を見渡そうと思う。

古くからさまざまな言葉で伝えられてきているラーマ物語の全貌につい

ては，東京外国語大学の水野善文教授が主宰する共同研究「多言語重層構造をなすインド文学史の先端的分析法と新記述」において，〈ラーマ物語〉部会で解明したいとわたしは願う。幸いにして筆者はその共同研究で〈ラーマ物語〉部会の取りまとめ役をしているので，大勢の研究者の力をいただいてその仕事を進める所存である。

その一環として筆者は，「16 世紀のヒンディー語で詠われた『ラーマの行いの湖』の意義 ── その形成に寄与した二つのラーマ物語り，そのあとにヒンディー語で詠われ演じられた三つのラーマ物語りの主要場面の邦訳 ──」の論文を提出した。それはヒンディー語で語り詠われ，演じられてきているラーマ物語の像を描く試みである。そして筆者はその研究会に参加する多くの研究者に，諸言語によるラーマ物語について考察と翻訳と論考を求めた。

諸言語による古くからのラーマ物語については，次の四点が手がかりを与えてくれよう。なお文献表のはじめに挙げたブルケーは，ラーマ物語の全容を南アジアの多くの言語について，発行年の 1950 には把握していたらしい。

Bulcke, Camille. *Rāmkathā, Utpatti aur Vikās*『ラーマ物語の起源と展開』, Prayāg: 1950.

Lutgendorf, Philip. *The Life of a Text: Performing the* Rāmcaritmānas *of Tulsidas*『テクストの生命：トゥルスィーダースのラームチャリトマーナスの例で』, Delhi: Oxford University Press, 1994 .

Richman, Paula（ed.）, *Many Rāmāyaṇas : The Diversity of a Narrative Tradition*『たくさんのラーマーヤナ：多様性と語りの伝統』, Berkeley: University of California Press, 1991.

Stasik, Danuta, *The Infinite Story: The Past and Present of The Rāmāyaṇas in Hindi*『ヒンディー語のラーマーヤナの過去と現在』, Delhi: Manohar, 2009.

本稿全般で参照した文献

底本：Poddār, Hanumānprasād（ed）. *Śrīrāmcaritmānas*（*saṭīk*）12th edition, Gorakhpur: Gītā Pres, 1961.

底本の英訳：Prasad, R.C.（edited and translated into Hindi and English）, *Shri Rama Charita Manasa*（*The Holi Lake of the Act of Rama*）, Delhi: Motilal Banarsidass, 1990.

底本の語彙索引：Callewaert, W.M. & P. Lutgendorf, *Rāmcaritmānas Word Index,* New Delhi: Manohar Publishers and Distributors, 1997.

研究書：Lutgendorf, Philip. *The Life of a Text: Performing the* Rāmcaritmānas *of Tulsidas,* Delhi: Oxford University Press, 1994（Previously published by the University of California Press, 1991）.

Vaudeville, Charlotte. *Étude sur les sources et la composition du Râmâyana de Tulsî-Dâs*, trad. hindi, Pondichéry, Institut français d'indologie, Vol. I. 1959, Vol. II 1965.

（原稿受付　2018 年 7 月 6 日）

〈研究ノート〉

Political Correctness における推奨語のコーパス分析：

職業を表す語に関する使用状況の考察

谷　岡　　亮

Abstract

Political correctness (PC) is the linguistic phenomenon that attempts to eliminate discriminatory aspects of language. Although PC has become widespread in English speaking countries, it is unclear if the use of politically correct words has become accepted. The purpose of this research is to identify the use of politically correct terminology found in the Corpus of Contemporary American English (COCA). In this study, 26 words that describe jobs were examined. The study shows that the use of politically correct words tends to fall into one of three distinct patterns and non-politically correct words are as commonly used as their PC equivalents. Moreover, it was discovered that words combined with '－person', such as businessperson and chairperson tend not to be used.

キーワード：political correctness，コーパス，COCA

1. はじめに

今日，英語は“Lingua franca”の地位を獲得し，世界中の人々によっ

て使用されている。昨今，日本においても企業の海外進出による国際化，多国籍化が進みもはや英語は不可欠 なコミュニケーションツールとなっている。一方，英語を使う機会は増えているものの十分な文化的背景を理解することなしに英語を使うことは，相手に誤解を与えたり，不快に させてしまうなど互いの信頼関係に影響しかねない。

1950 年代に始まった黒人公民権運動，マイノリティ・グループ運動，それに連動して起こった女性解放運動に触発され，言語的な面から差別を取り除き言語的な配慮，平等を試みる political correctness（政治的に妥当，以後 PC）は一時期過激な言い換えに発展したが，現在，PC の理解はアメリカでは専門家だけでなくほぼ一般的なレベルにまで浸透している言語現象である（宮本，1999)。複雑な文化的要因が絡み合う今日のビジネスシーンにおいて，PC の理解が重要なのは言うまでもないが，ビジネスのみならず日常生活においても不適切な語の使用は身近な人々を傷つけかねない。

本研究では PC 運動によって代替語として使用を推奨される語が実際にどの程度使用されているか，コーパスを使用しその使用状況，傾向を考察したい。

2. Political correctness とビジネスレターへの影響

1950 年代より始まった黒人公民権運動，それに連動するようにして起こった女性解放運動に影響し差別を言語の面から取り除こうとする PC 運動が英語圏の国々に大きな影響を与えた。そもそも PC とはいかなるものなのか確認したい。Collins Cobuild English Advanced Learner's Dictionary, Macmillan English Dictionary では以下のように定義されている。

“Political correctness is the attitude or policy of being extremely careful

not to offend or upset any group of people in society who have a disadvantage, or who have been treated differently because of their sex, race, or disability."

［Collins Cobuild English Advanced Learner's Dictionary］

"Politically correct language or behavior is not offensive, especially to people who has often been affected by discrimination"

［Macmillan English Dictionary for Advanced Learners］

つまり PC とは性別，人種，身体障害者など社会的少数派に対し差別を連想させたり不利益を与えるような言語，方言，態度をなくしていくための基準といえる。

とくにアメリカにおける PC 問題は女性解放運動との関係が深い。高野（2000）は以下のような具体例を挙げている。

⑴　男女を含む人称の総称として man が用いられてきたこと。
⑵　Everyone, everybody, nobody, one を受ける代名詞として he, his, him が用いられてきたこと。
⑶　女性だけに未婚・既婚を明示する Miss/Mrs. が用いられてきたこと。
⑷　女性を示す接尾辞として -ess が用いられてきたこと。
⑸　女性をセックスの対象と見なしたり，動物の特徴を女性に例える言葉が用いられてきたこと。　（高野，2000：3）

PC の概念がビジネスに影響を与えていることを忘れてはならない。まず使用語句への考慮である。女性の社会進出，ビジネスの国際化が進む昨今，差別を連想させるような語の使用は避ける必要がある。

表 1　Politically incorrect に当る語と使用が推奨される語の例

Non-PC		PC
職業	policeman	police officer
	stewardess	flight attendant
	fireman	firefighter
人種	Black	African-American
身障	blind	visually impaired individual

上記のようにビジネスシーンでは差別を連想させるような語の使用は避け，PC における代替語の使用が推奨されている。

さらに豊田（2000）は使用語句のみでなく，ビジネスレターにおける Salutation の変化について指摘している。不特定多数に向けた Salutation として Dear Sir や Gentlemen などが一般的に使用される傾向にあったが，PC の影響もあり昨今では以下のような文脈に合わせたものが一般的になってきている。

Dear Customer:（デパートからの手紙の宛名）
Dear Homeowner:（保険勧誘員からの手紙の宛名）
Dear Parts Manager:（自動車部品販売代理店への手紙の宛名）
（豊田，2000：2）

このような複雑な文化的背景に Geffner（1993）は今後 Salutation や Closing を省略する方向にビジネスレターの書式が変わっていくのではないかと述べている。

このように，語の使用やレターにおける Salutation など PC のビジネスシーンへの影響は決して小さなものではなく，今や PC の理解はビジネスを行っていくうえで非常に重要な役割を果たしているといえる。

3. 分析方法とデータ

昨今，ビジネスライティング関連の書籍のほとんどが差別を連想させる語の使用を避けるようにアドバイスしている。今回の研究の目的であるPC における使用推奨語の使用状況を以下の方法で検証していきたい。

3.1 使用コーパス

PC による推奨語の使用頻度を明らかにするために今回の研究では Corpus of Contemporary American English（以後 COCA）https://corpus.byu.edu/coca/ を使用した。

COCA を使用した理由として，まず COCA が現代アメリカ英語の大規模コーパスであるということである。2015 年の段階で約 5 億 3000 万語のデータが集められており，これはイギリスを代表する British National Corpus（以後 BNC）の 5 倍以上である。現代アメリカ英語の言語現象を調査するにあたり適切なデータを保有しているといえる。

また COCA はジャンル（Context）の均衡に配慮してデータを収集している均衡コーパスであり[(1)]，ジャンルに偏りのないデータを得ることができるというのも重要な側面である。さらに COCA は 1 年分のデータ収集量を 2000 万語に固定し，データ収集基準も一貫しているため，Davies（2011）が述べているように学術的で信頼性の高いモニターコーパスであるという特性も持ち合わせている。PC における使用推奨語と差別を連想させる語それぞれの頻度数を比較することで一般的にどちらの語が幅広く使用されているかその使用状況を観ることができると考える。

3.2 調査語

今回，COCA を使用し分析を行う調査語の選定は以下の方法で行った。

まず，具体例を挙げ，差別を連想させる語の使用を避けるよう説明している以下のビジネスライティング参考書 Davidson（1994），Miller & Swift（2001），篠田（1999）から職業を表す 30 語を選び出した。調査語は原則参考書から選んだものとし，-woman など複合語の観点から考察を拡大している。また調査語を絞るために 30 語をすべてコーパスにかけ 100 万語あたりの頻度数が Non-PC 語，PC における推奨語ともに 0.1 を切ったものはコーパス内にデータが少なくその差に優越をつけがたいため，今回の研究の調査語からは除外した。以上の選定により以下の 26 語を本研究の調査語とした。なお調査語はすべてレマ化（活用形を含めた検索）し数値を出している。

表 2　本研究における調査語一覧

Non-PC	PC	Non-PC	PC
adman	ad executive account executive	maid	house worker
airman	flier, pilot	mailman	mail carrier
anchorman	anchor	policeman	police officer
bellboy	bellhop	pressman	press operator
businessman	businessperson	repairman	repairer
cameraman	camera operator photographer	seamstress	sewer mender
chairman	chairperson, chair	salesman	salesperson
draftsman	drafter	serviceman	service engineer
fireman	firefighter	spokesman	spokesperson
fisherman	fisher, angler	stewardess	flight attendant
laundress laundryman	laundry worker	watchman	guard
lineman	line installer line repairer	waiter, waitress	server, waitstaff
longshoreman	docker stevedore	weatherman	weathercaster

4. 分析と考察

職業を表すのに元来用いられた男女間における差別を連想させる語とPC による使用推奨語の使用状況を分析した。PC がすでに一般レベルにまで浸透しているのであれば，推奨語のほうが一般的にその使用頻度は高いと予測できるが，今回の研究では異なった結果を示した。分析の結果，大きく 3 つの傾向が見られた。それぞれ考察したい。

4.1 Non-PC 語の使用も見られるが，使用推奨語が定着している語

まず，PC における使用推奨語が一般的に定着している例を考察したい。これらの語はコーパスによる分析の結果，Non-PC 語よりも使用を推奨される語のほうが一般に定着しているものである。つまり PC が意図しているところが言語使用に反映されているものである。

26 語中 9 語が該当し全体の 34.6% である。例を挙げ詳細を考察したい。

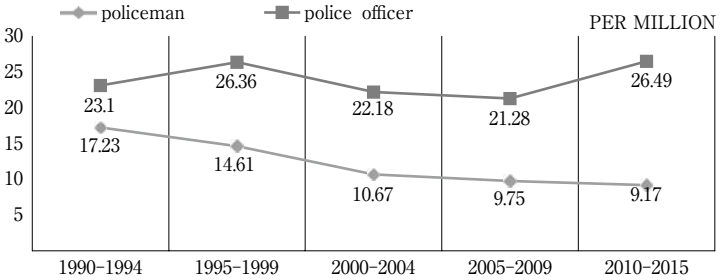

図 1　policeman, police officer の使用

まず policeman，police officer の例を見てみたい。policeman の使用は，全体の傾向として 1990 年以降減少し続けているのに対し police officer の使用は増加傾向にあることが見て取れる。細かく見ていくと 1990-1994 年では policeman が 100 万語あたり 17.23，police officer が 23.1 と互いに使

用における差異は少ないものの，policeman の使用は 1995-1999 年 14.61，2000-2004 年 10.67，2005-2009 年 9.75，2010-2015 年 9.17 と使用が年々減少していることがわかる。一方で police officer の使用は 1995-1999 年に 23.36 と上昇し，2000-2004 年，2005-2009 年に 22.18，21.28 と減少するも，2010-2015 年に 26.49 と上昇している。2010-2015 年では police officer の使用が 26.49 であるのに対し，policeman は 9.17 とその差は 3 倍近くとなっており，policeman の使用より police officer の使用が一般的になっている。同様の傾向がみられたのが fireman と firefighter である。

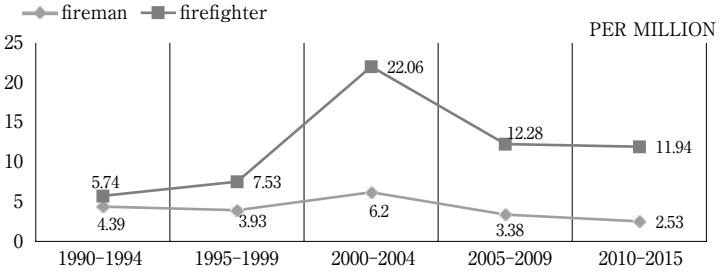

図 2　fireman, firefighter の使用

グラフを考察していくと 1990-1994 年においては fireman が 100 万語あたり 4.39，firefighter の使用が 5.74 と使用における差は少ない。1995-1999 年において fireman の使用は 4.39 から 3.93 へ微減し，firefighter の使用は 5.74 から 7.53 に増加したことで，数値的に両語の使用に差が出てきている。その後，2001 年 9 月 11 日に起きたアメリカ同時多発テロは fireman，firefighter 両語の使用に大きな転換をもたらしている。2000-2004 のデータにおいて fireman，firefighter ともに語の使用は上昇しているが，fireman は 1995-1999 年の 3.93 から 6.2 へ上昇しているのに対し，firefighter は 1995-1999 年の 7.53 から 22.06 と数値を大幅に上げている。以降，fireman は 2005-2009 年に 3.38，2010-2015 年は 2.53 と減少したのに対し，firefighter も同様にテロ事件以降，2005-2009 年 12.28，2010-2015

年 11.94 と減少しているが，fireman との数値差は大きく，firefighter の使用が一般に定着してきたと考えることができる。以下の語が推奨語の定着がみられた語である。

表 3　使用推奨語の定着がみられた語

Non-PC	PC	Non-PC	PC
airman	flier pilot	policeman	police officer
anchorman	anchor, anchorperson	seamstress	sewer, mender
cameraman	camera operator[(2)] photographer	stewardess	flight attendant
fisherman	fisher, angler	watchman	guard
fireman	firefighter		

4.2　使用推奨語の定着がみられず，依然 Non-PC 語の使用が多くみられる語

次に使用推奨語の定着がみられず依然 Non-PC 語の使用が一般的である語について見ていきたい。これらの語はコーパスによる分析の結果，PC によって使用を推奨されている語の使用がわずかであり，Non-PC 語のほうがより使用されていると考えられる語である。12 語がこれに該当し全体の約半数を占める。まずは businessman，businessperson の例を取って考察を進めたい。

図 3　businessman, businessperson, businesswoman, businesspeople の使用

businessman の使用は 1990-1994 年 100 万語あたり 25.87，1995-1999 年 17.77，2000-2004 年 15.28，2005-2009 年 12.11 と微減傾向にあるが，2010-2015 年には 13.23 と微増している。減少傾向にあるが 13.23 という数値を見れば，依然一定の使用傾向にあると考えられる。一方，代用語である businessperson の使用は 1990-1994 年 0.37，1995-1999 年 0.4，2000-2004 年 0.23，2005-2009 年 0.21 まで businessman と同様，わずかに減少傾向にあるが 2010-2015 年には 0.22 と微増している。businessperson の使用は数値からわかるようにごくわずかであり，businessman との数値差は歴然としていることから，businessman の使用は businessperson に比べ一般的であることがわかる。そのほかの代替語である businesswoman，businesspeople に関して，businesspeople は 1990 年-1994 年 1.08，1995 年-1999 年 1.27，2000 年-2004 年 1.34，2005 年-2009 年 1.1，2010 年-2015 年 0.78 と数値は低く横ばいに推移し，businesswoman は 1990 年-1994 年 0.85，1995 年-1999 年 1.03，2000 年-2004 年 0.87，2005 年-2009 年 1.12，2010 年-2015 年 1.92 と昨今上昇傾向にあるがどちらも businessman との数値差は大きい。同様の傾向が見られる語として chairman, chairperson の例を見てみたい。

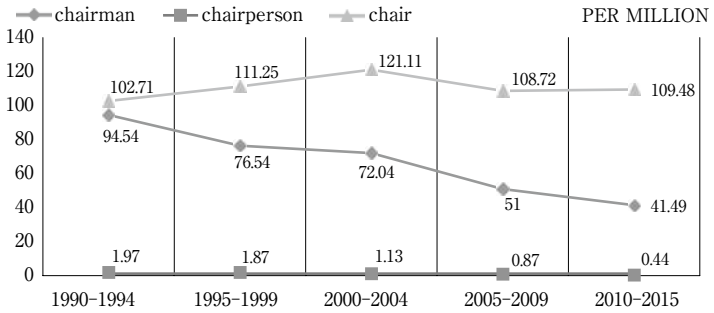

図 4　chairman, chairperson, chair の使用

年代別の使用状況をみると，興味深いことに，年々 chairman の単語使

用が減っていることが見てとれる。一見すればPCの定着によりchairmanの使用が年々減っていると推測することもできるが，chairpersonの年代別の使用状況が減少傾向にあること，数値の面でも互いの数値差は歴然としておりchairpersonとの単純比較ではchairmanが幅広く使われているといえる。一方で，昨今は，chairpersonの代わりにAccording to the former chair of the Group of ～（COCAより引用）とchairをchairmanの意味で使った文章も散見され，この代替語の出現によりchairmanの使用が落ち込んでいるとも考えられる。2010-2015年の区分においてchairを無作為に100語抽出し，「いす」の意味で使われている語を除外し，「議長」の意味で使われている単語を数えたところ全体として73語が該当した。概算ではあるがこの割合が正しければchairmanよりもchairの方は頻度数が高く，より使われている可能性がある。今回はchairmanとchairpersonを比較の上分類したが，chairの使用は今後のその使用を考察したい。以下がNon-PC語のほうがより使われている語である。

表4　Non-PC 語のほうが数値が高い語

Non-PC	PC	Non-PC	PC
adman	ad executive, ad agent	repairman	repairer
businessman	businessperson	salesman	salesperson
chairman	chairperson	serviceman	service engineer
lineman	line installer line repairer	spokesman	spokesperson
maid	house worker	waiter	server, waitstaff,
pressman	press operator	weatherman	weathercaster

4.3　互いに大差がなくその使用が均衡している語

PCにおける推奨語の定着がみられる語，使用推奨語よりも依然Non-PC語の使用が多くみられる語を考察してきたが，2つの傾向に当てはま

らない例があった。数値的にみると均衡しており，その語の使用において差がないように思われる語である。実際に 5 語が該当し全体の 19.2%である。例を挙げて詳細を考察したい。

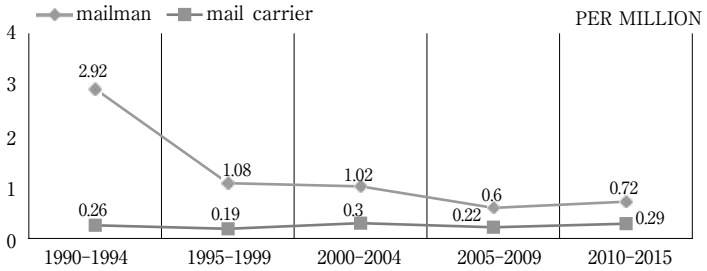

図 5　mailman, mail carrier の使用

mailman の使用は 1990-1994 年の 100 万語あたり 2.92 以降 1995-1999 年 1.08，2000-2009 年の 1.02，2005-2009 年 0.6，2010-2015 年 0.72 とその使用は減少している。一方，mail carrier の使用は 1990-1994 年が 0.26，1995-1999 年 0.19，2000-2004 年 0.3，2005-2009 年 0.22，2010-2015 年 が 0.29 と 1990 年以降低い数値が横ばいの状態が続いている。mailman の使用は 2010-2015 年 100 万語あたり 0.72 まで下がり，mailman の 0.29 と大差はなく一時期は mailman の使用は圧倒的であったが，近年では一概にどちらが使われているか判断しがたい。同様の結果が以下の語にみられた。

表 5　そのほかの使用が均衡している語

Non-PC	PC	Non-PC	PC
bellboy	bellhop	longshoreman	docker, stevedore
draftsman	drafter	mailman	mail carrier
laundress, laundryman	laundry worker		

4.4 -woman を使った語

参考書の推奨語には挙がっていなかったが辞書等によく見受けられるのが -woman を複合語の構成要素のように使用する語である。policewoman，chairwoman，saleswoman などが該当するが，-person を接尾辞のように使った語と数値的に均衡し定着はみられないケースがほとんどだった。下記，salesman，saleswoman，salesperson，spokeswoman の比較であるが，saleswoman，salesperson の使用は均衡し定着していると言い難い。

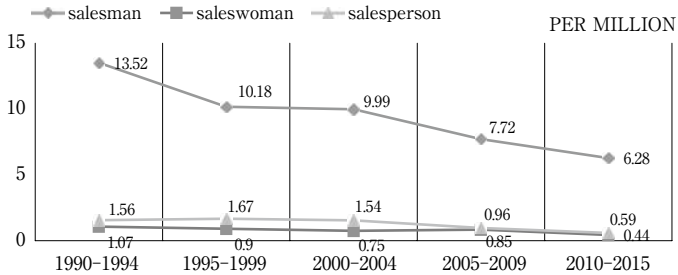

図 6 salesman, saleswoman, salesperson の使用

一方，spokeswoman は少し異なった傾向にあったので詳細を考察したい。全体を比較した際に spokesman の使用が多いのは顕著であるが，spokeswoman，spokesperson に関してみてみると 1990–1994 年の数値は spokeswoman が 100 万語あたり 7.71 に対し spokesperson が 4.15 とその差は少ないが 2010–2015 年には spokeswoman が 11.81，spokesperson が 4.39 とその差がより顕著なものとなっている。

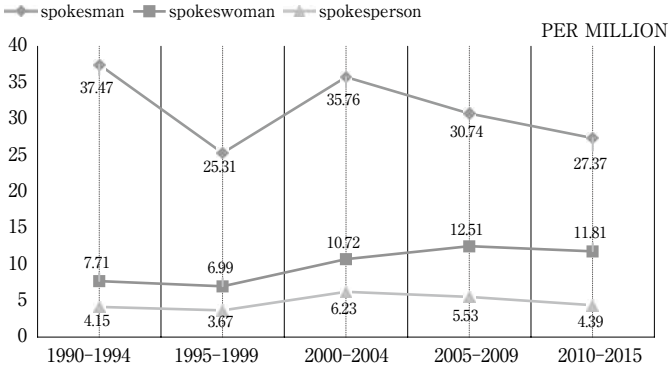

図 7　spokesman, spokeswoman, spokesperson の使用

数値的な比較を見れば spokeswoman のほうが spokesperson よりもより使用されるようになっているといえる。

4.5　まとめ

前述で考察してきたように，PC における使用推奨語の定着には語によってさまざまであることがわかった。大きく以下の 3 つの傾向が見られた。

1. Non-PC 語の使用もみられるが，使用推奨語が定着している。
2. 使用推奨語の定着がみられず，依然 Non-PC 語の使用が多くみられる。
3. 互いに大差がなくその使用は均衡している。

police officer，firefighter など PC が意図するように使用推奨語がコーパス分析上，幅広く使われている語もあれば，使用推奨語である business-person，chairperson よりも依然として Non-PC 語が一般的に使われている語，割合は少ないが mailman, mail carrier のように互いに大差がなく

その使用の優越を判断しにくい語が存在した。

PC における言語現象が社会にほぼ浸透した昨今，使用推奨語が一般的に高頻度で使われているのではないかと予想していたが本研究では異なる結果を示した。PC における使用推奨語が定着している例は全体の 34.6% とその数値は低く，使用推奨語でなく Non-PC 語の使用が多い語が 46.1% と Non-PC 語のほうがより頻繁に使われている語が多いことがわかった。PC における言語現象の理解とその現象下における言語使用との間に乖離していると言える。

語によって使用状況は様々であるといえるが，police officer，firefighter のように使用推奨語がより具体的に定められている語のほうが一般に受け入れられ幅広く使用されている傾向があり，businessperson，spokesperson，chairperson のように -person を複合語のように構成した語は一般的に使用の定着が低い傾向にあった。多くの参考書で -person を使った推奨語は多いがその定着は少ないといえる。同じ PC という概念のもとに作られた使用推奨語の定着が語によって差が生じていることは何らかの要因があると考えられる。

いくつか考えられる要因があるが，その中でも新しい発音の定着という観点で言語変化とその定着に着眼した Labov（1966）が行った調査に照らし合わせ，PC における使用推奨語の定着の差について考察してみたい。

第二次大戦以来，ニューヨーク市の上流中産階級の間で母音後に /r/ 発音が現れる率が著しく増加した。Labov は被験者の母音後に来る /r/ の発音に対しての主観的な態度について調査を行い，ニューヨーク市のほとんどの人がこの種の発音に対して抱く主観的な態度に変化が起こったことを導き出している。つまりは母音後に来る /r/ の発音が上流中産階級であるというステータスであるという言語使用者の主観的解釈こそが母音後に /r/ 発音が現れる率の上昇につながったと結論付けている。このことから新たな言語使用とは言語変化の結果起こったものではなく，むしろ逆であ

り，言語使用者の主観的な態度の変化こそが言語の形の変化を促したと考えている。

言語の使用に関しては言語使用者の教育水準，年齢，性差，社会階級など様々な要因が絡み合うため一概に判断しにくいが，police officer，fire-fighter などPCにおける使用推奨語が一般に受け入れられている語は言語使用者の主観的態度の変化をもたらす何らかの要因があり言語変化を促すことに成功したが，businessperson，spokesperson，chairperson のように -person を複合語のようにつけている使用推奨語の定着がみられない語は言語使用話者の言語使用に関する主観的な態度に変化をもたらす要因が少なく，使用が広まっていないとも考えられる。

本研究の結果を加味すれば，参考書など使用推奨語として言語の形だけが先行し，言語使用者へ受け入れられていない語が多くあるというのが現状ではないだろうか。PCの推奨語という大きなとらえ方に問題があり，差別を連想させるような語のそれぞれがどのように変わることで言語使用者に受け入れられるか考える必要があるのではないだろうか。

-woman を語の末尾に付随させた語の中でも spokeswoman はそのほかの語よりも使用度が高かった例を考えても，単語単位で傾向は異なると考えられる。

5. おわりに

今回の研究において，職業を表すのに元来用いられた性差を連想させる単語とPCによる使用推奨語の使用状況を分析した。PCがすでに一般レベルにまで浸透しているのであれば，推奨語のほうがその使用頻度は高いと考えられるが，今回の研究ではむしろ Non-PC 語のほうが頻繁に使われる語が多いことがわかった。PCという概念の定着を否定するわけではないが，PCにおける使用推奨語の定着は語によってさまざまであり，一概

に PC による使用推奨語が一般に定着しているとは言い難いことがわかった。特に今回行った分析においては police officer，firefighter のように PC における使用推奨語がより具体的に定められている語のほうが businessperson，chairperson，spokesperson のように -person を複合語として構成している語より一般的に使用が定着している傾向にあった。同じ PC という概念のもとに作られた推奨語であればすべての語が受け入れられ，使用が広まるという考えは安直であり，一つの語がどのように変われば受け入れられるのかよく熟考され，使用の定着が見られない場合は言語使用者の主観的態度に働きかけるような語の創造が必要なのかもしれない。PC における使用推奨語の定着の有無に関してどのような要因が関係しているのかさらに研究を進めたい。

《注》

（1） COCA は Spoken, Fiction, Magazine, Newspaper, Academic と決まったジャンルの中で均衡に配慮しデータ収集が行われている。また本研究におけるデータは 2016 年 2 月～3 月中旬にかけて抽出されたものである。

（2） camera operator の使用は cameraman の数値を下回っていたが photographer は cameraman の数値を上回っていたため使用推奨語が定着している語に分類した。

参考文献

Blake, G. & W. Bly, R. (1993). *The Elements of Technical Writing*. New York: Longman.

Collins COBUILD Advanced Learner's English Dictionary (2014). Harper Collins UK.

Davidson. W. (1994). *Business Writing: what works, what won't*. New York: Martin's Griffin.

Davies, M. (2011). The corpus of contemporary American English as the first reliable monitor corpus of English. *Literary and Linguistic computing*, 25 (4), 447-464.

Doyle, M. (1995). *The A-Z of Non-Sexist language*. London: The Women's

Press.
Geffner, B. A. (1993). *Business English*. New York: Barron's.
Henry, H & Christopher, C (1992) *The official politically correct dictionary and handbook*. Villard Books.
石川慎一郎（2012).『ベーシックコーパス言語学』ひつじ書房 .
Labov, W. (1966). *The Social stratification of English in New York City*. Center for Applied Linguistics.
Lindquist, H. (2010). *Corpus Linguistics and the Description of English*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
Macmillan English Dictionary for Advanced learners. (2007). London, England: Macmillan Publishers Limited.
Miller, C. & Swift, K. (2001). *The Handbook of Nonsexist Writing*. I Universe
宮本倫好（1999).『変貌するメディア英語』三修社.
Rees, N. (1993). *The politically Correct Phrasebook*. London: Bloomsbury.
篠田義明（1999).『グローバル・ビジネス英語教本』東京：南雲堂.
高野進（2000).「英語における“Political Correctness”の課題」『自然人間社会』29, 1-10 関東学院大学.
豊田沖人（2000).「英文ビジネスレターの最近の傾向――PC 運動の影響を中心に――」『武蔵工業大学 情報メディアセンタージャーナル』4 月号.
Trudgill, P. (1974). *Sociolinguistics: An Introduction*. Penguin Books.

（原稿受付　2018 年 6 月 28 日）

〈抄　録〉

「英語で授業をする」ことに関する研究(2)

── トップクラスの進学校生徒の意識調査分析 ──

保　坂　芳　男

Abstract

The course of study (2009) has required English teachers to use only English in class at high schools, in principle. As Watari (2011) mentioned, there is little empirical research on teaching English through English (TETE).

In the previous study I did some research on TETE with a focus on high school students at the middle level. Then this time I focused on high school students at the top level.

The questionnaire was developed by Mr. Uenishi (2011). I revised some to fit my research design. Firstly, exploratory factor analyses were conducted after collecting the data. Then three factors were yielded. They are as follows: All English, Environment and Classroom English. Secondly, a t-test was conducted to clarify the difference between male and female students. Thirdly, ANOVA tests were conducted using majors, interest, or proficiency in English as independent factors.

The results have shown that the female students prefer classroom English. The students with higher interest in English prefer teachers using TETE.

The key word in this field may be students with higher interest in English. Next time, I, therefore, have decided to make the same kind of research to students at the lower level.

キーワード：TETE，進学校，高校生の意識調査，因子分析

1. はじめに

2009 年高校用の学習指導要領（外国語）が告示された。その新学習指導要領は，2013 年から学年進行で実施されている。

当時，「授業は英語で行うことを基本とする」が話題になり，英語教育関連の雑誌や，シンポジュウムで白熱した議論が交わされた。

筆者は大学で教員養成に携わっており，毎年，都内の中学，高校の教育実習を訪問する機会が多い。告示当初は，喧々諤々とした議論をよく聞いていたが，最近では，以前と余り変わっていない日本語主体の教育現場を見ることが多いように思う。

学校教育の主人公は生徒である。そうだとすれば，「英語で授業をする」ことに関して，当事者の生徒はどう考えているのか，調査する必要があると思い，本研究を始めることにした。また，亘理（2011）が述べているように，授業を英語で行うことが効果的であるということは実証されていないことも本研究を行った主な理由の１つである（p. 34）。

昨年は中程度の高校を対象に調査研究を行った。その結果，英語が好きな生徒や英語力の高い生徒が TETE を望む傾向にあったので，今回は，いわゆる受験偏差値のかなり高い高校の生徒を対象に調査を行った。

2. 先行研究について

2.1　学習指導要領について

学習指導要領が高校の英語教師に「授業は英語で行うことを基本とする」と決めた理由は以下のとおりである。

英語に関する各科目については，その特質にかんがみ，生徒が英語に触

れる機会を充実するとともに，授業を実際のコミュニケーションの場面とするため，授業は英語で行うことを基本とする。 その際，生徒の理解の程度に応じた英語を用いるよう十分配慮するものとする。

告示当時反響が大きかったので，『高等学校学習指導要領解説　外国語編・英語編』には以下のような説明がある。

訳読や和文英訳，文法指導が中心とならないよう留意し，生徒が英語に触れるとともに，英語でコミュニケーションを行う機会を充実することが必要である。（略）これらのことを踏まえ，言語活動を行うことが授業の中心となっていれば，文法の説明などは日本語を交えて行うことも考えられる。

つまり英語はコミュニケーションの道具であり，日本の言語環境の中では英語を普段使う機会が少ないので，せめて学校現場ではできるだけ英語を使って欲しいということである。ただし，文法の説明等は日本語を交えて行っても良いが，日本語だけの授業は不可であるということである。

2.2　上西（2011）より

上西は，以前高校の教員であった利点を生かし，いち早くこの問題に取り組んだ。上西は学習指導要領の告示後に，英語教師 43 名，高校生 338 名に質問紙調査を行った。その結果，以下の 2 点が明らかにされた。

① 高校 1 年生と 2 年生を比較した場合，1 年生は全体的に英語での授業を希望しない傾向にあった。一方，2 年生は，受験との関連が高いと思われる項目（文法説明など）は英語での授業を希望しない傾向にあった。

② 「英語授業を英語で行う」ことに対して教師と生徒の意識には共通

点が見られ，全体的に否定的な考えを持っている。しかしながら，教師は，授業内容に関係ない場面では英語使用を肯定的にとらえている。

調査した高校の偏差値，回答した高校生の英語力や英語に対する興味との関係が気になるところではあるが，大変興味深い結果となっている。本研究では上西（2011）が作成した質問紙を参考にした。

2.3　Shin（2012）より

韓国における大変興味深い調査研究である。Shin は，韓国の高校の英語教員で，勤務当初は英語での授業を意欲的に行っていたが，しばらくして母語（韓国語）の授業に切り替えた若い英語教員 16 人に調査を行った。対象は，勤務 3 年未満，英語力が NS 並みに高い高校の教員である。

対象者の英語教員のうち 9 人は，1 か月以内に母語による授業に切り替えている。その理由は，生徒が授業を理解できない（15 人），進路が遅れる（14 人），教室の管理が難しい（11 人）であった。英語教師の英語力不足を原因にあげた教員は誰もいなかった。

2.4　SLA 研究より

SLA 研究の分野での TETE に関しては賛否両論である。この点に関しては，上西（2011）が丁寧によくまとめている。上西が「『語学の授業を目標言語で行う』ことに関して，多くの学者・教育者がその意義や問題点等について研究を行っている」（p. 116）と言っているように，賛否両論，百花繚乱である。

Atkinson（1993）は，英語力の低い学習者には L1 使用が効果的であるとし，「内容理解の確認，発話の促し，簡潔な指示，理解度の確認，語の定義の確認，時間短縮のための翻訳」（pp. 25-36）を例として挙げている。

一方で，Harbord は，Atkinson の考えには賛成できず，指示を L2 で

行うことやL2で教師と生徒が交流することが理想的なL2習得方法であると反論している（Harmer, p. 132）

また，Brown（2007）は，研究や経験からして「English only」は度が過ぎているのではないか，他方で，EFL環境では教師が母語を使いすぎることも問題だと指摘している（p. 247）。

2.5　中井（2010）より

中井（2010）は，文部科学省が2008年に行った中学校・高等学校英語教育実施状況調査結果概要を紹介している。

> 中学校においては「大半を英語を用いて行っている」「半分以上は英語を用いて行っている」と答えた割合は，いずれの学年においても約3分の1となっている（略）。
>
> 高等学校になると，オーラルコミュニケーション（OC）Ⅰの授業では，授業中に半分以上英語を用いると答えた割合が，国際関係（語学含む）の学科・コースで79.3%，普通科で54.6%となっている。これに対して，英語Ⅰでは，授業での英語使用が半分以下と答えた割合が，国際関係で66.6%，普通科で88.5%となっており，（略）リーディング，ライティング授業では普通科では英語の使用が半分以下と答えた割合が約95.5%に及ぶ（略）。
>
> 4技能を統合的に扱う中学校での「英語で授業を行う」実態からすれば，高校でいきなりすべての英語科目で「英語で行う」には無理があるように思われる。ただ，OCⅠの授業実態からみれば科目によっては十分可能であるとも思われる。（pp. 39-40）

中井の言うように，英語だけか母語使用も可という二者選択ではなくて，どの場面では，どういう生徒には，英語だけで授業を行うことが有効

で，一方，母語使用も有効であるかを細かく調査する必要があろう。

2.6　亘理（2011）より

亘理（2011）はSLA分野の多くの研究を分析する中で，新学習指導要領が目指す「英語で授業する」ことにはむしろ弊害が多いと，以下の3つの警告を鳴らしている（p. 39）。

① 英語で授業をしたからと言って学習者の英語使用が増えるわけではなく，L1の使用がむしろコミュニケーション活動を円滑にし，英語使用を促す可能性がある。
② コード切り替えは二言語話者同士にとってごく自然な振る舞いで，実際には授業の中でも性質の異なるいくつかの用途でL1が用いられているにもかかわらず，教師の多くが不要な「罪の意識」を感じており，新指導要領の要請はその意識を強める可能性がある。
③ 英語（だけ）での授業を要求することが，学習者の学習方略を狭め，教師の教育内容・教材構成を阻害する危険性がある。

2.7　保坂（2017）より

普通程度の高校生の意識調査の結果，以下の4点が明らかにされた。

① 因子分析の結果では，2年生，3年生ともほぼ同じような因子構造が見られた。3年生の方がそれぞれの因子に収束した質問項目が多く，授業の多くの部分において英語で授業を行うことを望む結果となった。また，2年生が，最初に「すべて英語で」という意識が高い一方で，3年生は，「雰囲気」重視であった。
② いずれの場合においても性別による意識の差は見られなかった。
③ 進路に関しては，2・3年とも理系志望の学生は，「雰囲気」作りの

ための英語による授業を望んではいなかった。

④　英語に対する興味に関しては，2・3年生も英語嫌い群が，英語での説明を避ける傾向が見られた。

⑤　成績に関しては，2・3年生とも上位群が英語での授業を望む傾向が見られた。

3. 本研究の目的・方法

3.1　研究の目的

本研究では，上記の先行研究を踏まえて，トップレベルの高校生がどういう場面で英語教師にTETEを望んでいるかを明らかにしたい。主たる本研究の目的は以下の2点である。

⑴　高校生はどういう場面で英語で授業をすることを望んでいるか。

⑵　生徒の性別，進路，学年，英語に対する好感度，英語の学力によって意識に差はあるか。

3.2　調査の実施

3.2.1　被調査者

関西にあるO高校に，2011年3月に質問紙調査をお願いした。O高校の受験偏差値は高校偏差値ナビでは74（https://www.sconavi.com/osaka/hensa/）である。

調査は高校1年次の3月に行った。保坂（2017）に準じて，高校2年生と扱うことにした。2年生136人（男子67人，女子68人，未記入1人）の回答を得ることができた。

3.2.2　質問紙の開発

質問紙は，上西（2011）を元に，生徒のアンケート等を参考に修正を加えた（資料 1)。また，生徒の属性として，卒業後の進路，英語に対する興味，英語力（自己申告）を追加した。生徒の興味と英語力に関しては 7 件法を用いた。

4. 分析とその結果

4.1.1　因子分析の結果

2 年生 136 人のデータを用いて因子分析を行った結果，5 回の反復で収束した（主因子法，Kaiser の正規化を伴うバリマックス法)。その結果，3 つの因子を抽出することができた（資料 2)。因子 1 に関しては，Q2，Q21，Q26，Q17 が英文法に関する項目である。しかしながら，英文法指導を英語で行うことは学習指導要領でさえも求めておらず，高校現場の普段の実態から判断して，英語の授業であるので文法指導も含めてすべて英語でやって欲しいという生徒の意識の表れであると解釈を行った。そこで，因子 1 は「すべて英語で」と命名した。

因子 2 に関しては，Q10「生徒をリラックスさせようとする時」，Q7「生徒を励ます時」は，Q11「人間関係を作りだす時」なので，「雰囲気」と命名した。

因子 3 に関しては，Q12「活動の説明をする時」，Q19「最初の挨拶」が上位に収束しているので，「教室英語」と命名した。

4.1.2　因子分析の結果の考察

F1 に英文法指導を含めて多くの質問項目が収束した。また，分散率も 31.6％と高いので，O 高校には，「すべて英語で」という意識の高い生徒が多いと考えられる。今回は，Q20「授業で習う内容の紹介をする時」が，

資料１　質問紙

Ⅰ．被調査者について

もしよければ出席番号をお願いします（　　）

該当するものに○をお願いします。

１．性別

①　男子　　②　女子

２．高校卒業後の進路

①　４年生大学　文系（英語・国際関係）　　②　４年生大学文系（①以外）

③　４年生大学　理系　　④　海外の大学

⑤　その他

以下の質問には①（全然そうではない）～⑦（本当にそうである）に１つに○をお願いします。

３．英語に対する興味

私は英語が好きである。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

４．英語の学力

私はこの学校において英語が得意な方である。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

Ⅱ．英語で授業をすることについて

以下の項目に関して、高校の英語Ⅰの授業で日本人の教員がすべて英語で授業をやることについてどう考えますか。①（全く英語ではして欲しくない）～⑦（全部、英語でして欲しい）の１つに○をお願いします。

1　新しい単語を説明する時。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

2　新出の文法の説明をする時。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

3　生徒に様々な指示をする時。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

4　日本や外国の文化について話す時。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

5　授業を受けるルール（姿勢，マナーなど）を説明する時。

①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

6　生徒に課題（宿題）の説明をする時。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

7　英語学習等に関して生徒を励ます時。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

8　生徒に（小）テストを課す時。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

9　生徒に英文内容を理解させる時。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

10　生徒をリラックスさせようとする時。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

11　人間関係を作り出す（出そうとする）時。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

裏もあります。

12　ゲームなど活動の説明をする時。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
13　前回の授業の復習をする時。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
14　本日の授業のまとめをする時。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
15　教師が生徒を注意したりする時。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

16　教師が体験談などの話をする時。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
17　今まで習った文法を復習する時。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
18　雑学やネタを言う時。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
19　最初の挨拶など。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

20　授業で習う内容の紹介をする時。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
21　複雑な英文の構造を説明する時。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
22　抽象的な内容を説明する時（より平易な単語で）　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
23　授業の重要ポイントを説明する時　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

24　本日の授業の流れを説明する時。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
25　生徒が日本語で質問してきた質問に答える時。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
26　日本語と英語の構造の違いについて説明する時。　①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

27　英語で授業が展開された時，あなたはどんなときに日本人教師に英語を使って欲しいですか？　上の項目以外であれば、具体的に書いてください。

ご協力ありがとうございました。せっかくのアンケートですので１枚も無駄にしたくありません。記入漏れがないか再度ご確認をお願いします。お疲れ様でした。

資料 2　因子分析の結果

	因子 1	因子 2	因子 3
Q2	.840	.110	.015
Q21	.837	.108	−.095
Q1	.725	.131	.128
Q23	.716	.166	.255
Q26	.708	.157	.020
Q9	.672	.057	.261
Q17	.651	.067	.229
Q14	.622	.109	.392
Q25	.573	.324	.071
Q6	.561	.331	.159
Q22	.553	.173	.327
Q10	.084	.966	.222
Q7	.199	.660	.317
Q11	.238	.619	.303
Q12	.206	.343	.673
Q19	−.007	.171	.615
Q16	.252	.303	.528
因子寄与率	31.6	10.8	10.9
α 係数	.915	.852	.719

どの因子にも収束しなかった。H. E. Palmer のいわゆる oral introduction のように，新しい言語材料を oral で紹介することを期待する生徒が見られなかったのも特徴的であった。

4.2　*t* 検定の結果

各因子に収束した質問項目の回答値の合計を，従属変数とし，性を独立

変数とする t 検定を行った。その結果，F3（教室英語）に関して，女子生徒の方が有意に高かった（t (133) = −3.3, p < .01）。

4.3　分散分析の結果

4.3.1　進路による比較

各因子に収束した質問項目の回答値の合計を，従属変数とし，進路先を独立変数とする 1 要因（5 水準）分散分析を行った。有意な差は見られなかった（p < .05）。

4.3.2　英語に対する好感度

7 件法（①全然そうでない～⑦本当にそうである）で，英語の対する好感度を生徒に尋ねた。「嫌い群」40 人（回答①～③），「普通群」59 人（回答④，⑤），「好き群」37 人（回答⑥，⑦）であった。

各因子に収束した質問項目の回答値の合計を，従属変数とし，英語に対する好感度を独立変数とする 1 要因（3 水準）分散分析を行った。その結果，以下の 3 点が明らかにされた。

① F1「すべて英語で」において，主効果が認められた（F (2,133) = 4.55, p < .05）。ボンフェローニの検定による多重比較の結果，「英語好き群」は，「英語嫌い群」と比べて，すべて英語でやって欲しいと思っているという結果となった（p < .05）。

② F2「雰囲気」においては，主効果は認められなかった（p < .05）（ただし有意傾向はあり）。

③ F3「教室英語」においては，主効果が認められた（F (2,133) = 4.55, p < .05）。ボンフェローニの検定による多重比較の結果，「英語好き群」は，「英語嫌い群」と比べて，教室英語を使用して欲しいと思っているという結果となった（p < .05）。

4.3.3　英語の学力

7 件法（①全然そうでない～⑦本当にそうである）で，英語の学力を生徒自身に尋ねた。下位群 45 人（回答①，②），中位群 49 人（回答③，④），上位群 42 人（回答⑤～⑦）であった。

各因子に収束した質問項目の回答値の合計を，従属変数とし，英語の学力を独立変数とする 1 要因（3 水準）分散分析を行った。どの因子においても，主効果は認められなかった。（$p < .05$）。

4.3.4　英語に対する好感度および英語の学力

各因子に収束した質問項目の回答値の合計を，従属変数とし，英語に対する好感度および英語学力を独立変数とする 2 要因（それぞれ 3 水準）分散分析を行った。

交互作用において有意な差は見られなかった（$p < .05$）。

5.　結果のまとめと考察

5.1　結果のまとめ

上記の結果をまとめると以下のようになる。

① 因子分析の結果では，英語の授業であるので「すべて英語で」やるべきだと考えている生徒が多いことが分かった。

② 教室英語使用に関しては，女子生徒の方が希望する傾向にあった。保坂（2017）では，性による有意な差は見られなかったが，O 校の特徴として，英語が好き（⑤～⑦）と回答した女子生徒は 51.6％で，男子生徒 27.3％の倍近くである。女子生徒の方が，英語好きが多いことが原因であるかもしれない。

③ 進路に関しては，有意な差は全くみられなかった。

④　英語に対する興味に関しては，英語好き群が，全体的に英語での授業を望む傾向が見られた。

⑤　成績に関しては，有意な差は全くみられなかった。

5.2　中堅高校との比較

保坂（2017）は，偏差値が 50 程度の高校で同様の調査を行ったが，それとの比較で明らかになったことは以下の 4 点である。本研究対象 0 校では 1 年次末に調査を行ったので，昨年度分析 A 高の 2 年生とで比較した。

①　A 高では「紹介」という因子を抽出できたが，O 高では抽出できなかった。

②　A 高では性差による有意差は見られなかったが，O 高では見られた。

③　専攻においては，A 高のみ有意差が見られた。

④　A 高は「英語の好感度」および「英語学力」に有意差が見られたが，O 高は，「好感度」のみに有意差が見られた。

6.　結論

今回の研究では，英語の成績よりも英語に対する好感度の方が，英語での授業に関して影響があるということが明らかになった。「英語で授業をやる」ことに固執すれば，英語嫌いを招く危険性があるのかもしれない。

従って，学習者の反応を見ながら適切に英語を使い，補助的に母語である日本語を使いながら授業を行うことが求められる。

7.　今後の課題

今後の課題として以下のことが考えられる。

① 質問紙の標準化

「説明」因子を，説明を含むすべて英語で授業を行うことであると解釈したが，それが妥当であるかは，「英語の授業なのですべて英語で行う」等の質問項目を追加する必要がある。そして再修正された質問紙を用いてさらに多くの高校生に質問紙調査を行い，質問紙の標準化を図る必要がある。

② 質的研究の必要性

量的な研究では，英語力上位群や英語好き群に特徴的な傾向が表れたが，質的な研究でその実証性を高める必要がある。

今後は英語力の高くない高校生を対象とした調査も望まれる。また，高校との接続の観点から，次期学習指導要領では中学校においても，外国語で授業を行うことを基本とする方針であるようである。中学生に対する調査も早急に行う必要があると思われる。

［謝辞］

本研究にご協力いただいた大阪市内の 0 高校の生徒の皆さま，先生方に心より感謝いたします。ありがとうございました。

さらに拓殖大学言語文化研究所にも感謝を申し上げます。平成 29 年度の研究助成により資料の収集が可能となり研究が大幅に進展致しました。ありがとうございました。

なお，本稿は，『日本言語教育 ICT 学会研究紀要』(2018 年 3 月発行）に掲載されたものを本紀要の書式等に合わせて若干修正したものです。今回，学会のご厚意により本紀要への転載が承認されました。記して感謝致します。ありがとうございました。

主要参考文献

上西幸治（2011).「『英語の授業は英語で行う』に関する一考察 —— 英語教師・高校生の意識を中心にして」*Setsunan Journal of English Education.*（摂南大学外国語学部研究紀要），第 5 号，115-141.

小篠敏明（1995).『Harold, E. Palmer の英語教授法に関する研究 —— 日本における展開を中心として』第一学習社.

岡部幸枝・松本茂（編）（2010).『高等学校新学習指導要領の展開外国語科英語編』，明治図書.

柴田美紀・横田秀樹（2014).『英語教育の素朴な疑問』，くろしお出版.

中井弘一（2010).「高等学校における「英語の授業は英語で授業を行う」についての一考察」『大阪女学院大学紀要』7 号，33-53.

平田和人（編）（2008).『中学校新学習指導要領の展開　外国語科英語編』，明治図書.

保坂芳男（2017).「「英語で授業をする」ことに関する研究 —— 高校生の意識調査から ——」『日本言語教育 ITC 学会紀要』第 4 巻，97-109.

文部科学省（2010).『高等学校学習指導要領解説 —— 外国語編・英語編』，開隆堂.

亘理陽一（2011).「外国語としての英語の教育における使用言語のバランスに関する批判的考察 —— 授業を「英語で行うことを基本とする」のは学習者にとって有益か ——」『教育学の研究と実践』第 6 号，北海道教育学会，33-42.

Atkinson, D. (1993). *Teaching monolingual classes,* London: Longman.

Brown, H. D. (2007). *Teaching by Principles: An Interactive Approach to Language Pedagogy* (3rd ed.), White Plains, NY: Pearson Education.

Cook, V. (2001). Using the first language in the classroom. *Canadian Modern Language Review,* 57, 402-423.

Harmer, J. (2001). *The practice of English language teaching* (3rd ed.), Harlow, UK: Pearson Longman.

Shin, Sang-Keun (2012). "It Cannot Be Done Alone" : The Socialization of Novice English Teachers in South Korea. *TESOL Quarterly, Vol. 46* (3), 542-567.

（原稿受付　2018 年 6 月 22 日）

拓殖大学研究所紀要投稿規則

（目的）

第１条　拓殖大学（以下，「本学」という。）に附置する，経営経理研究所，政治経済研究所，言語文化研究所，理工学総合研究所及び人文科学研究所（以下，「研究所」という。）が刊行する紀要には，多様な研究成果及び学術情報の発表の場を提供し，研究活動の促進に供することを目的とする。

（紀要他）

第２条　研究所の紀要は，次の各号のとおりとする。

⑴　経営経理研究所紀要『拓殖大学　経営経理研究』

⑵　政治経済研究所紀要『拓殖大学論集　政治・経済・法律研究』

⑶　言語文化研究所紀要『拓殖大学　語学研究』

⑷　理工学総合研究所紀要『拓殖大学　理工学研究報告』

⑸　人文科学研究所紀要『拓殖大学論集　人文・自然・人間科学研究』

２　研究所長は，次の事項について毎年度決定する。

⑴　紀要の『執筆予定表』の提出日

⑵　投稿する原稿（以下，「投稿原稿」という。）及び紀要の『投稿原稿表紙』の提出日

⑶　投稿原稿の査読等の日程

（投稿資格）

第３条　紀要の投稿者（共著の場合，投稿者のうち少なくとも１名）は，原則として研究所の兼担研究員および兼任研究員（以下「研究所員」という。）とする。

２　研究所の編集委員会が認める場合には，研究所員以外も投稿することができる。

（著作権）

第４条　投稿者は，紀要に掲載された著作物が，本学機関リポジトリ（以下「リポジトリ」という。）において公開されることおよび当該著作物の著作権のうち複製権・公衆送信権の権利行使を研究所に委託することを許諾しなければならない。

２　共同執筆として紀要に掲載する場合には，共同執筆者全員がリポジトリにおいて公開されることおよび当該著作物の著作権のうち複製権・公衆送信権の権利行使を研究所に委託することについて承諾し，投稿代表者に承諾書を提出しなけれ

ばならない。投稿代表者は，共同執筆者全員の承諾書を投稿する原稿と一緒に研究所に提出しなければならない。

（執筆要領および投稿原稿）

第５条　投稿原稿は，研究所の紀要執筆要領の指示に従って作成する。

２　投稿原稿は，図・表を含め，原則として返却しない。

３　学会等の刊行物に公表した原稿あるいは他の学会誌等に投稿中の原稿は，紀要に投稿することはできない（二重投稿の禁止）。

（原稿区分他）

第６条　投稿原稿区分は，次の表１，２のとおり定める。

表１　投稿原稿区分：経営経理研究所，政治経済研究所，言語文化研究所及び人文科学研究所

⑴論文	研究の課題，方法，結果，含意（考察），技術，表現について明確であり，独創性および学術的価値のある研究成果をまとめたもの。
⑵研究ノート	研究の中間報告で，将来，論文になりうるもの（論文の形式に準じる）。新しい方法の提示，新しい知見の速報などを含む。
⑶抄録	経営経理研究所，政治経済研究所，言語文化研究所，人文科学研究所の研究助成要領第 10 項⑵に該当するもの。
⑷その他	上記区分のいずれにも当てはまらない原稿（公開講座記録等）については，編集委員会において取り扱いを判断する。また，編集委員会が必要と認めた場合には，新たな種類の原稿を掲載することができる。

表２　投稿原稿区別：理工学総合研究所

⑴論文，⑵研究速報，⑶展望・解説，⑷設計・製図，⑸抄録（発表作品の概要を含む），⑹その他（公開講座記録等）

２　投稿原稿区分は，投稿者が選定する。ただし，紀要への掲載にあたっては，査読結果に基づいて，編集委員会の議を以て，投稿者に掲載の可否等を通知する。

３　紀要への投稿が決定した場合には，投稿者は 600 字以内で要旨を作成し，投稿した原稿のキーワードを 3～5 個選定する。ただし，要旨には，図・表や文献の使用あるいは引用は，認めない。

4　研究所研究助成を受けた研究所員の研究成果発表（原稿）の投稿原稿区分は，原則として論文とする。

5　研究所研究助成を受けた研究所員が，既に学会等で発表した研究成果（原稿）は，抄録として掲載することができる。

（投稿料他）

第 7 条　投稿者には，一切の原稿料を支払わない。

2　投稿者には，紀要 3 部を贈呈する。

3　投稿者が研究所員の場合には，掲載の抜き刷りを 50 部まで無料で贈呈する。50 部を超えて希望する場合は，超過分について有料とする。

（リポジトリへの公開の停止及び削除）

第 8 条　投稿者よりリポジトリへの公開の停止及び削除の申し出があった場合または編集委員会がリポジトリへの公開の停止及び削除が必要と判断した場合には，リポジトリへの公開の停止及び削除をおこなうことができる。

（その他）

第 9 条　本投稿規則に規定されていない事柄については，編集委員会の議を以て決定する。

（改廃）

第 10 条　この規則の改廃は，研究所運営委員会の議を経て研究所運営委員会委員長が決定する。

附　則

この規則は，平成 29 年 4 月 1 日から施行する。

拓殖大学言語文化研究所紀要『拓殖大学語学研究』執筆要領

1．発行回数

『拓殖大学語学研究』（以下，「紀要」という）は，原則として年 2 回発行する。その発行のため，以下の原稿提出締切日を厳守する。

⑴	原稿は，　9 月中旬締切－ 12 月発行
⑵	原稿は，11 月末日締切－　3 月発行

2．使用言語

用語は，日本語又は日本語以外の言語とする。ただし，日本語以外の言語での執筆を希望する場合は，事前に言語文化研究所編集委員会（以下，「編集委員会」という。）に申し出て，その承諾を得たときは，使用可能とする。

3．様式

投稿原稿は，完成原稿とし，原則としてワープロ原稿（A4 用紙を使用し，横書き，1 行 33 字× 27 行でプリント）2 部を編集委員会宛に提出する。

⑴　数字は，アラビア数字を用いる。

⑵　ローマ字（及び欧文）の場合は，ダブルスペースで 32 行。1 行の語数は日本語 33 文字分。

⑶　投稿原稿の分量は，本文と注及び図・表を含め，原則として，以下のとおりとする。

①	日本語論文による原稿	20,000 字（1 行 33 字× 27 行）以内	A4 縦版・横書
②	日本語以外の言語による原稿	20,000 字（ダブルスペース，20 枚）以内	

上記分量を超えた投稿原稿は，編集委員会で分割掲載等の制限をおこなうこともある。

投稿者の希望で，本紀要の複数号にわたって，同一タイトルで投稿することはできない。ただし，編集委員会が許可した場合に限り，同一タイトルの原稿を何回かに分けて投稿することができる。その場合は，最初の稿で全体像と回数を明示しなければならない。

⑷　上記以外の様式にて，投稿原稿の提出する場合には，編集委員会と協議する。

4. 投稿原稿

⑴　原稿区分は，「拓殖大学　研究所紀要投稿規則」に記載されている種別のいずれかとするが，「その他」の区分，定義については付記のとおりとする。

⑵　投稿原稿の受理日は，編集委員会に到着した日とする。
⑶　投稿は完成原稿の写しを投稿者が保有し，原本を編集委員会宛とする。
⑷　投稿原稿数の関係で，紀要に掲載できない場合には，拓殖大学言語文化研究所長（以下「所長」という）より，その旨を執筆者に通達する。

５．図・表・数式の表示

⑴　図・表の使用は，必要最小限にし，それぞれに通し番号と図・表名を付けて，本文中に挿入位置と原稿用紙上に枠で大きさを指定するする。図・表も分量に含める。
⑵　図および表は，コンピューター等を使って，きれいに作成すること。
⑶　数式は，専用ソフトを用いて正確に表現すること。

６．注・参考文献

⑴　注は，本文中に（右肩に片パーレンで）通し番号とし，執筆者の意向を尊重して脚注，後注とも可能とする。
⑵　引用・典拠の表示は各言語の一般的な方式に従うものとする。

７．執筆予定表の提出

紀要に投稿を希望するものは，『拓殖大学　語学研究』執筆予定表を，指定された期日までに研究所に提出する。

８．原稿の提出

投稿原稿と一緒に，『拓殖大学　語学研究』投稿原稿表紙に必要事項の記入，「拓殖大学機関リポジトリへの公開等の許諾」に捺印し，原稿提出期日までに添付する。

９．原稿の審査・変更・再提出

⑴　投稿原稿の採否は，編集委員会の指名した査読者の査読結果に基づいて，編集委員会が決定する。編集委員会は，原稿の区分の変更を投稿者に求める場合もある。
⑵　出された投稿原稿は，編集委員会の許可なしに変更してはならない。
⑶　編集委員会は，投稿者に若干の訂正あるいは書き直しを要請することができる。
⑷　編集委員会は，紀要に掲載しない事を決定した場合は，所長名の文書でその

旨を執筆者に通達する。

⑸　他の刊行物に既に発表された，もしくは投稿中の原稿は，紀要に投稿することができない。

10. 投稿原稿の電子媒体の提出

投稿者は，編集委員会の査読を経て，修正・加筆などが済み次第，A4 版用紙（縦版，横書き）にプリントした完成原稿 1 部と電子媒体を提出すること。

電子媒体の提出時には，コンピューターの機種名と使用 OS とソフトウェア名及びバージョン名を明記すること。

なお，手元には，必ずオリジナルの投稿原稿のデータを保管しておくこと。

11. 校正

投稿原稿の校正については，投稿者が初校および再校を行い，編集委員会と所長が三校を行う。この際の校正は，最小限の字句に限り，版組後の書き換え，追補は認めない。

校正は，所長の指示に従い，迅速に行う。

校正が，決められた期日までに行われない場合には，紀要に掲載できないこともある。

12. 改廃

この要領の改廃は，言語文化研究所会議の議を経て，所長が決定する。

附　則

この要領は，平成 26 年 4 月 1 日から施行する。

附　則

この要領は，平成 29 年 4 月 1 日から施行する。

付記：「その他」の区分・定義について

①	調査報告：	専門領域に関する調査。
②	資　　料：	原稿区分の範疇以外で教育・研究上有用であると考えられるもの。
③	書　　評：	専門領域の学術図書についての書評。
④	紹　　介：	専門領域に関するもの。

以上

執筆者紹介（目次掲載順）

阿久津　智（あ く つ・さ と る）外国語学部教授　日本語学

坂田　貞二（さ か た・て い じ）拓殖大学名誉教授　ヒンディー語学，南アジア民俗文化論

谷岡　　亮（たにおか・り ょ う）外国語学部講師（非常勤）英語教育，言語学

保坂　芳男（ほ さ か・よ し お）外国語学部教授　英語教育，英語教育史

拓殖大学　語学研究　第 139 号　ISSN　No. 1348-8384

2018 年 12 月 17 日　印　刷

2018 年 12 月 22 日　発　行

編　　集　拓殖大学言語文化研究所編集委員会

編集委員　寺家村博　阿久津智　平山邦彦　廣澤明彦　松下直弘　岩崎光一
大野英樹　小林敏宏　末延俊生　永江貴子　藤本淳史　村上祐紀
渡邉俊彦

発 行 者　拓殖大学言語文化研究所長　寺家村博

発 行 所　拓殖大学言語文化研究所
〒112-8585　東京都文京区小日向 3 丁目 4 番地 14 号
Tel. 03-3947-7595

印 刷 所　㈱ 外為印刷